

2010年度 修士論文

パラガの身体技法

Techniques of the Body in Paraga

早稲田大学 大学院スポーツ科学研究科

スポーツ科学専攻 スポーツ人類学研究領域

5009A054-9

園家 晋一

Sonoya, Shinichi

研究指導教員： 寒川 恒夫 教授

目次

第1章 序論.....	1
第1節 問題の所在.....	1
第2節 先行研究の検討.....	1
第3節 研究方法.....	5
第4節 本論の構成.....	5
第1項 展開.....	6
第2項 作業概念の設定.....	6
第2章 調査対象地及びブギス＝マカッサル族概観.....	8
第1節 調査対象概観.....	8
第1項 南スラウェシ州と州都マカッサル.....	8
第2節 ブギス＝マカッサル族.....	9
第1項 民族の名称と言葉.....	9
第2項 ブギス＝マカッサル族の歴史的背景.....	10
第3項 ブギス＝マカッサル族の文字と世界観.....	10
第4項 ブギス＝マカッサル族の移住.....	11
第5項 ブギス＝マカッサル族の民族性.....	12
第3章 文献にみるパラガ.....	13
第1節 Walter Kaudern、『GAMES AND DANCES IN CELEBES』（1929）.....	14
第1項 セパ・ラガの名称.....	14
第2項 セパ・ラガの起源.....	14
第3項 セパ・ラガのルールと目的.....	15
第4項 蹴り方.....	15
第2節 Departemen Pendidikan dan Kebudayaan 『PERMAINAN RAKYAT SUKU BUGIS MAKASSAR DI SULAWESI SELATAN』（1979/1980）.....	16
第1項 名称.....	16
第2項 ゲームの特徴.....	16
第3項 セパ・ラガの実施.....	16
第4項 男性の判断基準としてのセパ・ラガ.....	17
第5項 民衆への広がり.....	18
第6項 技術としての手の使用.....	18
第7項 意味を持つ蹴り方.....	18
第8項 遊びの評価.....	19
第9項 儀礼的要素.....	20
第3節 『PERMAINAN RAKYAT SULAWESI SELATAN』（2001）.....	20

第1項 名称	20
第2項 遊びの特徴	20
第3項 リーダーの役割	20
第4項 民族衣装	21
第5項 実施場所	21
第6項 ブギス社会におけるラガに実践	21
第7項 マカッサル社会におけるセパ・ラガ	22
第4節 本章まとめ	23
第4章 現在のパラガ	24
第1節 パラガ概観	24
第1項 名称	24
第2項 調査対象	24
第3項 パラガとカレボシ広場	25
第4項 パラガの逸話	27
第2節 道具と遊び方	27
第1項 道具	28
第2項 遊び方	28
第3節 パラガの特徴	30
第1項 手や腕の使用	30
第2項 ススン(susun)	31
第3項 フォルマシ (formasi)	32
第3節 本章のまとめ	33
第5章 蹴り方の比較	34
第1節 セパ・ラガの蹴り方	34
第1項 セパ・ラガの特徴と道具の特徴	34
第2項 セパ・ラガの蹴り方	35
第2節 セパ・ラガの蹴り方の変容	35
第1項 趾骨での蹴り方	35
第2項 蹴り方の変容	36
第2節 ススンの創造と趾骨での蹴り方	37
第1項 ススンと蹴り方	37
第3節 本章のまとめ	38
第6章 結論	39
引用・文献目録	41
写真リスト	44

第1章 序論

第1節 問題の所在

本研究では、インドネシア共和国で実施されている蹴球遊戯の1つであるパラガ (paraga¹) を対象とする。パラガは、他の蹴球遊戯にはみられない蹴り方を有し、手の使用が技術として認められ、ススンとフォルマシ²といったコンビネーションが他の地域の蹴球遊戯と一線を画する。ところがパラガに関する先行研究は少なく、不透明な部分が多い³。

本研究ではパラガに関する先行研究を整理し、フィールドデータを加え、パラガの身体技法の変容を論じることを目的とする。特に蹴り方に焦点を当て、記述し比較することで、パラガを特徴づける身体技法が成立した理由を明らかにできると考える。また、本研究では、身体技法を記述、考察する過程でパラガの実態を明らかにすることも暗に意味している。

身体技法の記述には、スポーツ科学の成果である、機能解剖学の言葉を援用する。

最後に本論によってブギス＝マカッサル族のパラガが知られるとともに、それが東南アジアの蹴球遊戯の比較研究の資料となることも筆者の意図するところである。

第2節 先行研究の検討

本節では、パラガに関する先行研究について検討を行う。これら以外に、インドネシアの歴史、経済、文化、政治に関する先行研究は、適宜参照とする。

では、初めにパラガに関するもので、本研究にとっても有益である文献を取り上げる。英語文献としては、Walter Kaudern の『GAMES AND DANCES IN CELEBES』 (1929) である。また、インドネシア語で書かれたものとして、Departemen Pendidikan dan Kebudayaan の『PERMAINAN RAKYAT SUKU BUGIS MAKASSAR DI SULAWESI SELATAN』 (1979/1980) と Negara Makassar 『PERMAINAN RAKYAT SULAWESI SELATAN』(2001)を取り上げる。なお、第3章でこれらの文献の詳細をまとめる。

身体技法研究が文化人類学とスポーツ人類学でどのように行われてきたのか考察することで本研究の位置づけを明確にする。

¹ paraga は、マカッサル語である。pa は「人」の意、raga は「籐製ボール」意で、「ラガの選手」、「ラガを蹴る人」という意味となる。pa raga はインドネシア語で「pemain-raga」となり、「ラガの選手」という意味である。

² ススンとフォルマシは、パラガを特徴づける身体技法の1つである。詳細は、第4章で論じる。

³ これは、スラウェシ島に限らず、インドネシア全体に通じることである。「オランダ領東インド時代には、H.Damm による集団競技・対人競技の民族詩集成研究、A.C.Kruyt によるブランコ、蹴闘技研究。独立後は C.Geertz によるバリの闘鶏研究。これら以外にまとまった研究はなく、多くの民族スポーツが実態不明のままであった。」[石井 2002 : 474]

第1項 Walter Kaudern 『GAMES AND DANCES IN CELEBES』

題名にみるとおりセレベス島⁴の GAMES と DANCES について論じられている。上述したように、インドネシア民族スポーツの研究は少なく、本書はセレベス島のスポーツ状況を知る上で重要である。

パラガは Football⁵の章 (85-105) で収められている。原著で引用されているところによると、パラガの初出は「1859年、マカッサル半島で、マテス (Matthes⁶) によりに記録された」[Kaudern 1929 : 86]と述べている。マテスの著書を購入することはできなかったが、カウデルンに従うなら、スラウェッシ島のセパ・ラガが文献で確認できるのは 1859年ということになる。ところが、カウデルンも述べるように、マテスは「詳細を述べてはいなかった。」[ibid. : 86]ため、紹介される程度であったと考えられる。すなわち、パラガが初めて研究対象となったのは、1929年ということになる。

研究の目的は、伝播、起源、分布である。セレベス島やその隣島でみられるセパ・ラガを、主にオランダ語文献と博物館に収められている籐製ボールの形状や分布状況の考察によって、セレベスへの伝播とセレベス以西への伝播やその経路を考察している。そのため、各ラガ・ゲームの名称が記述される程度で、歴史・文化・精神性・身体技法などの詳細は述べられていない。しかし、セパ・ラガのルールへの言及がみられる。目的やルールは身体技法を規定するため、以下の記述は見逃すことはできない。

そのゲームの目的は、ボールが地面につくことなしに、輪の中の1人のプレイヤーから他のプレイヤーまでボールを送り、足の内側でボールを蹴ることである[ibid. : 85]。

「ボールがつくことなしに」、「足の内側で」の2つは、東南アジアで広く分布するセパ・ラガの特徴を現すキーワードである。「複数の参加者が協力しあつて鞠を蹴り上げ、地面に落とさずに渡しあい続ける球戯が、東アジア・東南アジア地域にも広く見られる。」[石井 1998b : 62-66]また、マレーシアのセパ・ラガは、「おもに足の内側を用いて空中に蹴り上げつづけ、地面に落ちないようにコントロールする器用さと技術を示すものである。」[富沢 1998 : 424]とされ、1929年当時、セレベス島でおこなわれていたのは、「マレー人の伝統スポーツとしてもっとも有名なものがセパ・ラガ」[ibid. : 424]と同様のスポーツである可能性が高い。

また、ボールの構造、ゲームのルール、各民族の名称を比較考察し、セパ・ラガがインドネシアの太古からのスポーツではありえない、と結論をだした。また、「ブギス人がスマトラ島へ商業的を拡大し始めた際、セパ・ラガを知るようになった。」[Kaudern 1929 : 103]とスマトラ島

⁴ 現在は、スラウェッシ島。

⁵ ここでの Football は、主に足で球体を扱うものを指すと考えられる。

⁶ B・F・Matthes はオランダ人言語学者である。マテスはウギ語、マサングサラ語ともに正確かつ詳細に調査した。マテスはロンタルである紙本であるを問わず、数多くの文献を蒐集した。マテス自身、ブギス=マカッサル文学の選集を編んだほか、大部分のブギス-オランダ語辞典およびマカッサル-オランダ語辞典を出版した[マトウラダ 1980 : 318]。

やマレー半島からの大陸からの起源説を提示した。

上記の2つの理由から、Kaudern[1929]の文献において、スラウェッシ島で行われていたセパ・ラガは、主に内足を使用し、地面にラガを落とすことなく、蹴り上げ続ける、「蹴鞠型⁷」のスポーツであったと考えられる。また、本研究で目的の1つとしているパラガを特徴づける身体技法に関する記述はみられなかった。

第2項 Departemen Pendidikan dan Kebudayaan 『PERMAINAN RAKYAT SUKU BUGIS MAKASSAR DI SULAWESI SELATAN』

第4章で詳しく述べるが、この著書はインドネシア政府の教育文化省が編集して刊行された。この著書は「この部局があつかう『伝統価値』は失われる前に書き留めておかねばならない各地の風習といったものでしかない。」[鏡味 2000 : 87]と判断される。そのため、この著書に政府のイデオロギーが認められるものの、インドネシアの伝統スポーツに関する研究は非常に少ない現状を考えると、本研究にとっては貴重な資料となる。また、カウデルンの著書を比較対象とすることで、身体技法の変容をとらえることが可能となる。

内容は、名称、環境、背景、発展史、参加者、道具、音楽、遊び方、蹴り方の項目に分けて記述されている。これらの点に関しては、カウデルンの著書よりも詳しく記述されている。文章で述べられているわけではないが、特筆すべきは挿絵でパラガを特徴付けるススンとフォルマシが描かれている点である。

Kaudern [1929]は、この身体技法を記述していなかった。このことは、1929年から1979/1980年度までに、なんらかの影響によりこの身体技法が生まれと考えられる。というのは、Kaudern [1929]が他の地域にみられない特徴を書き逃すことは考え難い。伝播や分布を主たる関心としていたので、「ボールを蹴る代わりに、彼らは時々、肘でボールを打つこともある」[Kaudern 1929 : 92]と特殊な例は示しているからである。

第3項 Nonci 『PERMAINAN RAKYAT SULAWESI SELATAN』(2001)

この著書は、マッカサル州より刊行された。スハルト退陣後のインドネシアでは、中央集権から地方分権へ移行したとされる。恐らく、その結果、刊行された著書であると考えられる。為政者側の刊行物であるため、1979/1980年度の著書と同質であるのか、そうでないのかについては定かではない。また本書を読む限り、地方分権への転換により、南スラウェッシ州に居住する4民族の独自性が示されたわけでもない。

内容・構成は1979/1980年度とほぼ同様であった。しかし、蹴り方に意味が付随しているという点とその蹴り方の説明がなされた点は、身体技法を知る上で重要である。また、表紙には1979/1980年度版と同じように、ススンとフォルマの挿絵が表紙に記載された。

⁷ 数人が円状に広がり、使用する球体を地面から落とさないように渡しあい続ける球戯のことである。また、蹴鞠と同じ形式をもつためである [石井 1998b : 62-66]。

第4項 身体技法研究史の考察

ここでは、身体技法研究がどのように研究されてきたかを考察することで、本論の位置づけを与え、本論を明確すると考えられる。

身体技法の研究とは、身体の動きを通して民族文化の世界観、思想、神話などを理解するものである。身体技法とは「人間がそれぞれの社会で伝統的な様態でその身体を用いる仕方」[モース 1976 : 121]とモースが概念化して以来、研究が展開されてきた。それは、ある特定の社会課程の中でさまざまな身体的動作が無意識的に習得されるありようを主題化している。モース[1976]によれば、人の歩き方、走り方、座り方、眠り方、泳ぎ方などの身体動作や姿勢のすべては、社会的に伝承され、自然に習得される身体の技法ということになる。そしてその後、身体技法という概念を用いて多くの研究者によって展開されてきた。

文化人類学においては、文化の約束に従う象徴的側面と物理的法則に拘束される実用的側面が研究されてきた⁸。初期は主に前者が、身振りによる表現・伝達や文化の中の身体の象徴性に関心が向けられた。後者は、物質文化や技術との関連を問題にした。

ここまで、簡単に身体技法の研究史を概観してきたが、スポーツ文化やスポーツ人類学の研究領域でも、身体技法の概念を用いて研究が展開された⁹。しかし、上述したような文化人類学的関心や視点から、スポーツ事象を扱った研究であった。ここでの対象は、民族スポーツである。

そこでは、スポーツが行われる外縁情報に解釈の根拠を求めている。具体的には、当該社会の歴史、起源、由来、組織、神話などである。それにより、身体技法を解釈し説明するのであるが、身体技法自体は日常語で記述されるか、詳述されなかった¹⁰。逆説的にいえば、外縁情報が欠如する場合は、研究対象としての地位を獲得できなかったといえる。

スポーツ人類学が対象とする舞踊を主に研究対象としてきた舞踊学では、過去より舞踊技法の記録法つまり、身体動作の記述に独自の功績を残している¹¹。

ところで、スポーツ人類学とは、スポーツ¹²を文化人類学の方法で研究する学問である。また、スポーツ人類学とその研究とは、寒川[2004]によると、

スポーツ科学と文化人類学の学際領域といえる。それゆえ、どのような学問領域を展開するかという研究の着想は、スポーツ科学と文化人類学の関心のそれぞれから生じられることになる[ibid. : 2]。

⁸ 野村[1999 : 8-20]

⁹ 例えば、『体育の科学』1998.48では、「特集民族スポーツと身体技法」と題されて特集が組まれている。

¹⁰ 波照間[2004 : 42]は、「スポーツ人類学者は、身体技法をテーマとしていながら、もっとも基礎的な要素である動きの記述を避ける傾向にあった。」と指摘している。

¹¹ 波照間[2004]によると、譜語法、ラバノーテーション、モーションキャプチャーがあげられている[ibid. : 40-43]。「もっとも広く普及しているラバノーテーションでさえ、読んだり書いたりして使いこなすのには専門的機関で教育を受けなければならず、修得にかなりの時間を要する。」[ibid. : 41-42]と動きの記述の難しさを述べている。

¹²

また、スポーツを対象とすることから、スポーツ¹³にみられる身体技法を対象とする。これを、「身体技法」[寒川 2004 : 7]と表現した。本論においても寒川に倣い、またスポーツ科学に足場をおく身体技法研究という意味も込めて「身体技法」という言葉を使用することとする。

ところで、身体技法は、スポーツ技術といってもさしつかえない¹⁴。また競技スポーツや競争的な伝統スポーツ自体にみられる身体技法は、様式化された技法の型が確立しているため、文化人類学がおこなってきた研究方法をそのまま当てはめることはできない。なぜなら、身体の動きを通じた世界観、思想、神話はほとんど存在しないことが多いからである。また、動き自体から文化を抽出する方法論や研究は、現在のところほとんどみられない。というのは、動きの複雑さや記述の困難さから、それらが身体技法研究の方法として妥当ではないと判断されてきたのだろう。

したがって、資料的制限や形骸化した民族スポーツの状況から、対象スポーツが行われる外縁情報から身体技法の解釈を行うことは可能であっても飛躍した解釈を生み、質の高い研究は難しいと判断される。しかし、身体技法をスポーツ科学の成果の1つである機能解剖学の言葉を使用して記述することで、客観的な身体技法の記述が解釈の判断材料になり、研究対象としての地位を獲得できると考えられる。スポーツ科学の言葉で記述し説明することで、「身体技法の問題を更に深めること」[寒川 2004 : 13]に繋がると考える。

第3節 研究方法

研究方法は以下の3つである。

1. フィールドワークでの聞き取り調査

2007年7月13日～8月2日、2010年2月10日～2月26日の2回にわたってスラウェッシ島マカッサルを中心にフィールドワークを行い、聞き取り調査を行った。聞き取り調査によるデータは、注で年月日を記すこととする。

2. 映像、画像資料の分析

上記2回のフィールドワークで得た映像や画像を重要参考資料とした。これには、南スラウェッシ州観光案内書で得た観光用パンフレットを含む。

3. 文献調査

先行研究や当該民族・地域の基礎情報は文献調査により得た。

第4節 本論の構成

¹³ ここでの「スポーツ」は随意筋の運動のみを指さず、競争の形をとらない遊び、舞踊、身体をも含む[寒川 2004 : 3]。

¹⁴ 寒川[2004 : 7]は、スポーツ技術（身体技法）という書き方をしている。

第1項 展開

本研究では、インドネシア、マカッサルで実施されているパラガを対象として、その実態を明らかにするとともに、その過程で身体技法の変容をめぐる問題を論じようとするものである。変容を論じるにあたり、文献資料とフィールドワークのデータを時間軸に沿って並べ、変容を追う。また、身体技法の記述に関しては、スポーツ科学の研究成果である解剖学の言葉を援用する。

このような展望のもと以下のように論じるものとする。

第2章では、ブギス＝マカッサル及び調査対象地を概観する。

第3章では、パラガに関する3つの文献資料を整理し、マカッサルで行われてきたセパ・ラガを再構成することを目的とする。

第4章では、フィールドワークのデータをもとに現在実施されるパラガを詳述する。

第5章では、3章、4章の内容を踏まえて、パラガを特徴づける身体技法が創られた過程を、実践者の語りと身体技法の比較から考察する。

第2項 作業概念の設定

本研究遂行上、次の作業概念を設定した。ただし、同じ事象を指すのに文献の年代により、違う名称が用いられていることがある。基本的には、文献に従い特に注意が必要な場合には、脚注をつける。

蹴球遊戯

球体やそれに準ずる物や羽根を主に足で扱う遊戯を「蹴球遊戯」と定義する。蹴球遊戯は、日本の蹴鞠、中国のチェンツー、タイのタクロー、インドネシアとマレーシアのセパ・ラガなどである。

セパ・ラガ (sepak raga¹⁵) とタクロー (takraw¹⁶)

籐製のボール（以下、ラガ）を用い、主に足で扱うスポーツで、なおかつインドネシアかマレーシアで行われるスポーツを「セパ・ラガ」、タイで行われるスポーツを「タクロー」と定義する。両者は、数人の男が円形に広がり「地面にラガを落とすことなく如何に長く蹴り続けるか」を目的としている。また、名称は違うのみで、同じ目的で行われる。

パラガ (paraga¹⁷)

ラガを主に足で扱い、手の使用が技術として認められ、ススンやフォルマシを構成し、民族衣

¹⁵ sepak は「蹴る」、raga は「籐製ボール」の意で、「籐製ボールを蹴る」という意味である。インドネシア語は、マレー語を母体としているため、意味を同じである。

¹⁶ takraw はタイ語で「蹴る」の意味である[石井 1998 : 65]。

¹⁷ マカッサル語である paraga の pa は、「人」、raga は「籐製ボール」という意味で、paraga は「ラガの選手」「ラガを蹴る人」という意味である。インドネシア語では、pemain-raga「ラガの選手」となる。

装を身につけて実践されるスポーツを「パラガ」と定義する。例えば、マカッサルの路上でラガを蹴っていてもパラガではなく、セパ・ラガである。

「パラガ」に相当するスポーツは、さまざまな名称を持つことが文献やフィールドワークにより確認できた。しかし、現地ではパラガが最も使用されていた。よって本論では、パラガと呼ぶことにする。

本研究において、インドネシア語の訳出作業は必須であった。辞書は以下のものを使用した。

- ・ 佐々木重次編 『最新インドネシア語小辞典 第 1.3 版』
- ・ Alan M.Stevens and A.ED Schmidbgall-Tellings 『KAMUS LENGKAP INDONESIA-INGRIS』
- ・ 『KAMUS POPULER INGRIS-MAKSSAR INDONESIA- MAKSSAR』

第2章 調査対象地及びブギス＝マカッサル族概観

第1節 調査対象概観

第1項 南スラウェッシ州と州都マカッサル

マカッサル市は、スラウェッシ島南スラウェッシ州の州都である。スラウェッシ島はインドネシア¹国土のほぼ中心に位置し、首都ジャカルタから飛行機で約2時間の距離にある。マカッサル市には、人口114万人が居住し、インドネシア第7位の都市である。東部インドネシア地域では、政治経済の中心である。

南スラウェッシ州には、マカッサル、ブギス、トラジャ、マンダル、といった4民族が主に居住し、この4民族でそのほとんどが占められている。この中で、人口はブギスが最も多く、マカッサル、トラジャ、マンダルと続く²。

マカッサルは、国際交易地としてさまざまな国と交流してきた。マカッサルには、1613年にイギリスが、1618年にはデンマークが取引所を建設する。さらに、スペイン、ポルトガル、中国も交易に関わるようになる。しかし、国際的貿易地としての繁栄は、香料交易の独占をはかるオランダ東インド会社を招くことになる。ゴワ王国は、スピールマン将軍率いるオランダ東インド会社軍とボネ王国の王子アル・パラッカ率いるブギス軍との連合軍とのマカッサル戦争（1666-1669）に敗れる。これを契機に、マカッサルからオランダ以外の西欧諸国は撤退する。以後、マカッサルにはオランダ東インド会社（VOC）商館が設置され、オランダの交易ネットワークの一部として発展していくことになるのである。

1940年代末から60年代半ばにかけてインドネシア各地でイスラム国家樹立（ダフル・イスラム）運動が起こる。それに呼応して、南スラウェッシ州でも、南スラウェッシ国軍士官カハル・ムザカールが軍部を率いて武力反乱を開始した³。マカッサルの近代化は、この反乱が終了する1965年を待たなければならなかった。

マカッサルという地名は、2度改称されている。マカッサルは、1950年代に地方反乱の舞台となった。そのため、反ジャワ意識の高揚を恐れた中央政府は、1971年に種族名を意識させない名称であるウジュンパンダンへと改称される。しかし、1998年にはマカッサルへと再び改称される。この背景には、市民のマカッサルへの愛着が強く、水面下でマカッサルへの復帰運動も続けられた。その結果、マカッサル出身のハビビ大統領によって、ウジュンパンダンとは再びマカッ

¹ 赤道を挟んで東西5200平方キロ、南北1900キロに広がる島嶼国家である。国土面積は、約189万平方キロメートル（日本の約5倍）で、人口は、約2.31億人（2009年政府推計）が生活している。またインドネシアの宗教は、イスラム教88.6%、キリスト教8.9%（プロテスタント5.8%、カトリック3.1%）、ヒンズー教1.7%、仏教0.6%、儒教0.1%、その他0.1%である [外務省ホームページ <http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/indonesia/data.html>]2010年11月28日参照]

² 2000年センサスによると、ブギス族501万人、マカッサル族198万人。[石井米雄監修2008:625]

³ カハル・ムザカールの反乱（1950-1965）と呼ばれる。

サル在地名に戻されることになる。

ブギス＝マカッサル社会では、畑作や水稲耕作を基本としている。またイスラム教の影響が強く商業文化が浸透している。倉田[倉田 1995]は、ブギス＝マカッサルの生業を次のように述べる。

畑作や水稲耕作を基本とした農民社会の典型はジャワをはじめとし、アチェ、バタック、ミナンカバウ、ブギス、マカッサル、社会がこれであって、イスラム教の影響が強く商業文化が浸透している。また、これらの社会には換金作物が植民地時代から入ってきている。さらに水稲耕作を基本とする社会は複雑な社会階層分化をもたらし、かつての王国文化を開花させ・・・(略)・・・これらの社会は祖先崇拜や超自然力に対する信仰とヒンドゥー文化、イスラムが混交したのが実態であって、この様相は多様であるが大部分はイスラムが優位となっている[倉田 1995 :]。

現在でも工業化は達成されておらず、農業や漁業を中心としている。しかしマカッサルを訪れると、経済発展の波が伺える。新空港の開港、郊外のショッピングセンターや高級住宅地が建設、マカッサルのシンボルであるカレボシ広場は複合型施設へと改修された。さらに1997年よりインターネットの利用⁴も可能で、若者の主たる関心は携帯電話、インターネット、ファッションと日本の若者と同じような生活を送っている。

第2節 ブギス＝マカッサル族

第1項 民族の名称と言葉

ブギス、マカッサルという名称は、インドネシア語による呼称である。ブギス語でウギ (ugi) といい、ウギ語を話す。マカッサル族はマカッサル語でマンカサラットといい、マンカサラ語を話す。マカッサル語は、「同じ南スラウェシ州に属する他民族の言語 (ブギス語、サダントラジャ語、マンダール語など) から最も遠い位置にある。」[伊藤 2000 : 630]とされる。しかし、両者の言語や文化が似ていることから、ブギス＝マカッサル族並称され研究されてきた。また、ブギス＝マカッサル族社会は、オランダ慣習法研究においては、ブギス社会は、マカッサル社会とともに南西スラウェシとして、一括される。馬淵は次のように、述べている。

ブギス＝マカッサル社会の場合、いわば“神器奉戴共同体” (ornamentschap) というべきものであって、共同体結合の象徴として神器およびそれをめぐる儀礼によって特徴づけられている。神器は、槍、剣、旗、霊石であって、その神秘的な力が人間および作物の豊穰を確保するものと信じられている。スラウェシ西南部地域の住民、すなわち、マカッサル、ブギス両族は、一方では熱烈なイスラム教徒でありながら、前イスラム的な信仰を保持して矛盾を感じていない。しかも、このような信仰が共同体結合に基本的な重要性をもつのであ

⁴ 松井 2002 : 42-49

るが、これらの神器奉戴共同体は郷共同体、村落連合体、さては地方的な王侯国まで含んでいる[馬淵 1974 : 51]。

並列される呼称と研究に関して、佐久間[1979]の研究に基づいてまとめると、南スラウェシ州の歴史的要因⁵より、マカッサルでの研究は、文化要素 1 つ 1 つについての考察が必要である、と南スラウェシ州の民族文化研究の問題点を指摘している。なぜなら、民族それぞれの居住地域が認められるものの、その範囲は地理的にかなりの広さを有するため、各集団における文化の偏差も大きい。この点がおろそかにされ研究されてきた嫌いがある。ブギスの文化、マカッサルの文化と構えた論の進め方は資料の扱い方によっては、危険を孕むのである [ibid : 207]。本論でも、マカッサル族かブギス族かを特定できない場合は、佐久間の指摘に従いブギス=マカッサル族とする。

第 2 項 ブギス=マカッサル族の歴史的背景

ブギス=マカッサル族の祖先は、オーストラリアの原住民の祖先であるオーストロメラネソイドというグループだと主張されている。さらに、モンゴロイド種のグループが日本から、琉球、台湾、フィリピンを移動し、南スラウェシにおいて諸民族、諸文化との混合があったのは起源前 2 万年から 1 万年くらいまえだという説が主張されている。

その後、アジア大陸東南部からモンゴロイド的体系のオーストロネシア語系の言語を使う焼畑耕作民がスラウェシ北部にも渡来してきた。そのため、これらの地域の神話伝承には外来渡来を示している。

ブギス=マカッサル族は、新マレー人に分類される。新マレー人とは、歴史時代に入って外来文化と接触し独自の文化を発達させた民族である。また、海岸近くに住みインド文明やイスラム教文化の影響を受け、特に西欧文明との接触が直接あって社会の変動も著しい。

マカッサル族が歴史の表舞台に登場するのは、13-14 世紀頃に成立したと言われるゴワ王国の発展も伴ってである。マカッサルの交易都市としての発展は、ゴワ王国時代に遡る。1511 年のマラッカ落後、香料交易を掌握してきたマレー人はインドネシア島嶼部に拡散した。その一部はマカッサルを拠点としたため、マカッサルは、香料交易及び食糧供給基地として栄え始める。1603 年にゴワ王国はイスラームに入信する。ゴワ王国に隣接するタロ王国の王パッティンガロワンの治世 (1590-1637) にマカッサルは国際的な貿易地として貿易港として頂点に達する。そのためマカッサルという地名は、国際的貿易港として有名となる

第 3 項 ブギス=マカッサル族の文字と世界観

ブギス=マカッサル族の歴史は、ロンタラ⁶によるものが多数残っている。

⁵ マカッサル族のゴワ王国とブギス族のボネ王国が勢力争いをもたらしたため、異なる集団の接触、大規模な人口移動という歴史的要因によって、各集団が同化する傾向も認められる。

⁶ ロンタラとは、ロンタル椰子に書かれた文字のことをいう。現存するものは、17 世紀以降に書かれた記録がほとんどであり、イスラム改宗以前から王統記、王家日記などがある。それ以前

アクサラ・ロンタラ (aksara lontara) と呼ばれる文字を持っていた。これは、「サンスクリット文字に由来するもの」[ibid.319]である。アクサラ・ロンタラは、乾いた椰子の葉からできている古い時代の本で、黒い粉末のついた尖った道具で掻き傷をつけ、これに色をつけて記された。その後、16世紀には簡略化された形アクサラ・ロンタラは、アクサラ・セラン (aksara serang) と呼ばれる。これら2つを総称してロンタラと呼ばれる。しかし、17世紀に以降イスラム教とイスラム文学が南スラウェッシンに影響を及ぼすようになるとともに、ブギス=マカッサル族の書物はアラビア文字で記されるようになる。

アクサラ・ロンタラやアクサラ・セランで書かれたブギス=マカッサル族の文献の中で最も重要なものの1つは、スレ・ガリゴ本である。また、スレ・ガリゴ本は、ブギス=マカッサル族の世界観を構成する基礎を成す。それ以外にもブギス=マカッサル人の世界観を構成するために重要な役割を果たす著作が存在する。その概要をマトウラダ[マトウラダ (加藤剛他訳) 1980]の研究を引用する。

これは、不思議なことを尊ぶブギス人、マカッサル人の間に昔から伝わる神話を数多く蒐集したものである。この本以外には、生活上の指針や行為規範としての役割を果たす書物もある。例えば、祖先からの訓告 (パセン)、法令集、種々の親族集団の長老の定めた規約や決定集 (ラパン) 等である。さらにまた、王族の系譜 (アトリオトロン) および、過去に実在し、その後伝説化した英雄たちの物語 (パウ・パウ) 等、歴史資料としての書物がある。[ibid. : 320]。

それ以外にも、民話・説話 (物語、笑い話、擬人化された動物説話等)、叙述に関する記述 (コティカ)、詩句、歌唱、なぞなぞを集めた書物もある。それは、ラ・ガリゴ (La Galigo) である。ラ・ガリゴには、南スラウェッシン州に前イスラム的諸信仰が根付く以前の古い宗教がみられる。このように、この地域では、物質的意味での近代化や都市化が進んでいるが、精神的には都市部においても依然とし、伝統的価値観が根強く残っている。

第4項 ブギス=マカッサル族の移住

ブギス=マカッサル族の他地域への移動は、16世紀から始まる。まずは、マカッサル族のゴワ王国のインドネシア東部地域支配に始まった。ゴワ王国は、貿易国家として栄え、南スラウェッシンだけではなくインドネシア東地域を支配し、多くの影響を与えた。その結果、東インドネシアには今でも多くのマカッサル人が居住している。次に、南スラウェッシンの諸王国の間に戦争がおこった。マカッサルの政情不安が続いたために移住がおこった。インドネシア東部諸地域にはマカッサル族だけではなく、ブギス族も居住している。また、この移動は、19世紀前半のオラ

の記録は、「オランダ東インド会社とゴワ王国との戦争の間に多少焼失したと思われること、更に、現在のロンタラを読んで研究を行っている人間が10人にも満たないという憂慮される状況の上、現存しているロンタラの過半数がオランダ国内に保存されているなどの理由も重なって、マカッサル族の15世紀以前の歴史については殆どわかっていない。」[佐久間 1980 : 31]

ンダとの戦争まで引き続くことになる。

現代の大規模な移動は、イスラム国家建設運動（ダルル・イスラーム運動）、が引き金となり1950年代前後から始まる。これは、「カハール・ムザカールの反乱」と呼び1950年～1965年と15年間続く。そのため、国内ばかりではなく、オーストラリアやマレーシアといった国外にも移住している。

第5項 ブギス＝マカッサル族の民族性

インドネシアでは、多民族国家であるため各民族の特徴がよく語られる⁷。ここでは、ブギス＝マカッサル族は一括され、「気性の荒さと度胸」「喧嘩早い」などと形容される。このような民族性を理解するためのキーワードとして、また「ブギス＝マカッサル社会と文化の多くの側面を包括している概念」[マトウラダ 1980 : 330]として「シリ (siri)」という言葉がある。シリとは「恥」に近い意味を持つ言葉で、特に男女関係で辱めを与えた相手を殺してシリを晴らすことが慣習として残っている⁸。シリを晴らすための殺人事件は、1980年代まで頻繁に起こっていたようである。

⁷ 『インドネシア 暮らし訪ねて島から島へ』[1999]や『地球の歩き方』などに代表される旅行ガイドブックには、しばしば民族の特徴が語られる。

⁸ シリに関する具体的な研究として伊藤 [1993] の研究があげられる。

第3章 文献にみるパラガ¹

本章では、次の3つの文献を整理しパラガを再構成することを目的とする。第4章で現在のパラガと比較考察することが可能となる。

- ① 『GAMES AND DANCES IN CELEBES』 [Kaudern 1929]
- ② 『PERMAINAN RAKYAT SUKU BUGIS MAKASSAR DI SULAWESI SELATAN²』 [Departemen Pendidikan dan Kebudayaan 1979/1980]
- ③ 『PERMAINAN RAKYAT SULAWESI SELATAN³』[2001]

蹴球遊戯は東アジア・東南アジア一円に広く分布している⁴。インドネシア、マレーシア、タイ、といった東南アジアの一地域という視点からセパ・ラガやタクローが研究されてきた。『民族遊戯大事典』[1998]や『SOME GAMES OF ASIA』[1974]に代表されるように、蹴球遊戯は研究対象となっているが、国ごとに分類されるため民族ごとの蹴球遊戯がクローズアップされることはない。そのため、セパ・ラガはインドネシアの蹴球遊戯の代表として「籐製のラガを足で扱い地面に落とさないように蹴り続ける遊び」と一括されてきた嫌いがある。民族単位のセパ・ラガやタクローが研究対象とされることはほとんどなかった。そのため各国の蹴球遊戯の関係や1国内のセパ・ラガの関係についても、不明な点が多い。

しかも、インドネシアにおける民族スポーツの研究はほとんどみられない。インドネシアの民族スポーツの閉鎖的な状況を打破したのは、研究者ではなく、スハルト政権の文化政策である。この政策により、地域ごとの遊びや舞踊が記録され、出版された。この著書は、研究書としての位置づけを与えられている。しかし、参考文献が示されることなく、研究としての手続きを踏んでいるとは言い難い。また、質としては「書き留めた」[鏡味 2000: 90]程度である。そして、本章で扱う著書は、聞き取り調査によりブギス=マカッサル族のセパ・ラガを再構成したと判断される。しかし、ブギス=マカッサル族の民族スポーツに不明な点が多いことを鑑みると、貴重な資料として扱わざるを得ない。

このような状況において、Kaudern[1929]の研究は、スラウェシ島で行われる蹴球遊戯を初めて研究対象としてスマトラ島、マレー半島とスラウェシ島を関連づけた貴重な研究であると位置づけられる。

¹ 本章では1つの文献を整理するため、引用に関してはページのみを記すこととする。

² 日本語訳は、『南スラウェシにおける民衆の遊び』となる。

³ 日本語訳は、『南スラウェシ州の民衆の遊び』となる。

⁴ 『民族遊戯大辞典』[1998]参照。また、1965年にはセパ・ラガとタクローを母体としてセパ・タクローが誕生し、現在では世界中に愛好者がひろがっている。

第1節 Walter Kaudern、『GAMES AND DANCES IN CELEBES』（1929）

Kaudern は、題名にみる通りセレベス島の GAMES と DANCES について報告している。本著では、Football⁵の章（85-105）でブギス＝マカッサル族のセパ・ラガが紹介されている。セレベス島で行われていたセパ・ラガを対象として、起源、伝播、分布の問題を論じた。セレベス島に限らず、中国、韓国、日本までを視野に入れた研究は卓見である。文献調査が主で、豊富なオランダ語文献を駆使し論じている。また、Kaudern はスラウェッシ島に居住したこともあり、フィールドワークによるデータも多少ながら反映されていると判断できる。英語文献の中で、セレベス島のセパ・ラガが研究対象となるのは、管見ながら初めてである。また、ブギス＝マカッサル族のセパ・ラガをスマトラ島と関連づけた貴重な研究である。Kaudern は、Matthes [1859]の文献がセパ・ラガの初出であると述べている。

Kaudern は、マカッサルで行われているセパ・ラガは、マカッサルで古代より行われていたものではなく、マカッサル族のゴア王国の国際的交易を背景として、スマトラ島もしくはマレー半島から伝播したと、結論づけた。また、セパ・ラガはイスラム教と結びつき、イスラムの布教に一役買ったとされる。そして、その後ゴア王国の支配地域⁶へと伝播した。

ところが、Kaudern の関心がセパ・ラガの起源、伝播、分布であるため、起源、伝播、分布に関わること以外は述べられていない。その中には、ゲームの名称、ゲームのルール、手の使用が認められる特殊な例が述べられるのみである。セパ・ラガの概要、歴史、文化、社会が詳述されているわけではない。

第1項 セパ・ラガの名称

ブギス語では madaga と raga、マカッサル語では araga と raga、である。ブギス語とマカッサル語でも共通してラガが使用されている。ラガはインドネシア語の名詞で「籐製ラガ」、動詞で「籐製ラガを蹴る」という意味である。ブギス語の madaga は辞書で確認することができないが、マカッサル語の araga は、インドネシア語で sepak raga であり、「籐製ラガを蹴る」遊びやゲームを指すと考えられる。

第2項 セパ・ラガの起源

ラガの構造、ゲームのルール、各民族の名称を比較し、ほとんど変化がみられないという事実から、セパ・ラガがインドネシアの太古からのスポーツではありえないと考えられる。また、パラガの起源に触れるのは難しいとしながらも、次の3点にその根拠を求めた。マレーシアの古い玩具やセレベス島から離れた島の行事に影響を与えていないこと、主に沿岸のイスラム教徒に知られていること、イスラム教の祝祭と結びついていたこと、である。スラウェッシ島のセパ・ラ

⁵ ここでの Football は、主に足で球体を扱うものを指すと考えられる。

⁶ 現在のニューギニア以西の島々を指す。

ガが伝播された可能性を示している。また、伝播の時期は、イスラムの影響を受けて、ブギス人やマカッサル人が列島の東の一部において、本当に重要な役割を果たした時代、15、16世紀以前でありうることはほとんどないと考えられる。スマトラ島やマレー半島との貿易を足掛かりとして、15,16世紀にマカッサルへ伝播し始めた。そして、この遊びがセレベス島よりスマトラ島のほうが古い可能性が高いと結論づけた[101-103]。さらに、

異教徒⁷の儀式と関係しているとは思えません。なぜなら、それはセレベス島や他の島の原住民に一般的に知られていないからです。一方で、イスラム教徒はセパ・ラガに精通しています。また四旬節の時に、セパ・ラガをすることが好きでした。またそれは、セパ・ラガがアラビア起源であることを示すかもしれません[105]。

とセパ・ラガがアラビア起源である可能性を示し、イスラム教と密接な関係を示唆した。

第3項 セパ・ラガのルールと目的

参加者は、男性のみである。年齢は青年か高学年の少年で、数人が約5メートルの円状に広がる。ゲームの目的は「ラガが地面につくことなしに、輪の中の1人のプレイヤーから他のプレイヤーまでラガを送り、足の内側でラガを蹴ること。」[85]である。蹴り損ねたり、地面にラガが落ちた場合、そのゲームは終了となり、すぐに次の新しいゲームが始まる。このセパ・ラガの説明は、インドネシアやマレーシアのセパ・ラガ、タイのタクローと同じである⁸。ということは、個人がいかにかラガを落とさないように蹴り続けるか、または他のプレイヤーにいかにか続けさせるか、の2点が問題になるだろう。そのために、ラガ保持者が次のプレイヤーに受け取りやすいラガを送ることが必要になると考えられる。

例外もあり、siao⁹島の原住民は、「ラガを蹴る代わりに、彼らは時々、肘でラガを打つこともある」[92]と肘を使用する例を示した。

第4項 蹴り方

詳述されているわけではないが、上記の目的・ルールと「足の内側」[]から推察すると、サッカーのトレーニングの1つであるリフティングで使用されるインサイドキック¹⁰を使用した蹴り方に類似している。リフティングで使用されるインサイドで、ラガを蹴るためには、股関節を外旋・屈曲と同時に、膝関節の内旋によって内足を地面と平行に保つ。3つの動作から成り立って

⁷ 本文では「heathen」という単語が使用されている。「heathen」の意味は、イスラム教「(キリスト教、ユダヤ教) にとっての異教徒」、ここではイスラム教が大部分を占める南スラウェシ州における異教徒、つまりブギス=マカッサルの伝統的宗教をさす。

⁸ 民族遊戯大辞典[1998 大林他編]によると、タイやマレーシアで行われる伝統的な蹴球、セパ・ラガやタクローはネットをはさんでの対戦型ゲームではなく、蹴鞠形式で行われる。直径5m程度の円になって地面にラガを落とさないように蹴りつづけるというものである。[ibid. : 65.424]

⁹ スラウェシ島北部上方に位置する島。

¹⁰ 足の内側を用いる。

いる。そして、ラガを捉える面が地面と並行でなければ、ラガは上方へ上らず連続で蹴ることはできない。平らな板で、ラガを上弾くのと同一要領である。

第2節 Departemen Pendidikan dan Kebudayaan 『PERMAINAN RAKYAT SUKU BUGIS MAKASSAR DI SULAWESI SELATAN』 (1979/1980)

先述したように、この著書は、政府による教育文化省、歴史・伝統価値局のプロジェクト¹¹による刊行物である。この著書は「この部局があつかう『伝統価値』は失われる前に書き留めておかねばならない各地の風習といったものでしかない。」[鏡味 2000 : 87]と判断される。

また、セパ・ラガが書かれている章[6-16]では、Kaudern[1929]しか参考文献が示されず、文献を辿ることはできないが、聞き取り調査により、パラガの歴史を再構成したように判断される。しかし、インドネシアの伝統スポーツに関する研究は非常に少なく、スラウェシ島でも同じ状況であり、本研究にとっては大事な資料となる。

第1節と同様、1979/1980年度の著書にみられるセパ・ラガについてまとめていく。

第1項 名称

ブギス人はウギ語で marraga と mandaga を使用する。マカッサル人はインドネシア語の中にある akraga を使用した。marraga、mandaga、akraga 全てに共通する raga は、この遊びの使用道具指す。そして raga という言葉は、ブギス＝マカッサル族の言語に共通の siraga-raga に起源をもつ。siraga-raga は「他人を楽しませる」という意味で、言葉の意味と機能からセパ・ラガを理解すれば、「他人を楽しませる」スポーツであるといえる。

第2項 ゲームの特徴

セパ・ラガはスポーツと芸術の要素を含むと評されている[6]。セパ・ラガは男性 5～15 人が円状に広がって実施される

リーダーのラガを真上に投げる行為が、ゲームスタートの合図になる。地面に落ちたラガに誰かが向かい遊びが始まる。その後は順番にラガを回し、「デモンストレート」[9]していく。人の機会を奪うこと、円の外側を向いてラガを蹴ること、は禁止事項となる。

この遊びは、通常ドラムや打楽器の演奏を伴う。

第3項 セパ・ラガの実施

セパ・ラガは、儀式とアトラクションの要素をもつ。前者は、王国の公的な祭礼の時に必ず実

¹¹ 教育文化省 (Departemen Pendidikan dan Kebudayaan) の文化総局の4つの部局のうち、歴史・伝統価値局が大きな役割を果たす。歴史・伝統価値局はインドネシア各地の歴史や伝統価値を掘り起こし、それを国民文化に統合する役割をになう部局で、1967/77年度から20年近くかけて、インドネシア各州の地方史や民話、伝統儀礼、伝統的遊びやスポーツなどを調査して記録し刊行するプロジェクトを行ってきた[鏡味 2000 : 87]

施される儀式の1つとして、重要視されていた。例えば、国王の就任式や貴族の宴会である。また、後者は結婚式や収穫祭でゲストを楽しませるためにアトラクションとして実施されることもあった。

第4項 男性の判断基準としてのセパ・ラガ

セパ・ラガは、社会化としての機能を持っていた。プレイヤーと観客間、特に若者達の男女の出会いの場になる。ゴア王国の地域では、男子はラガが上手でなければ完全ではないと考えられていた。それに加え、男子はラガが上手ではないことは、結婚することができないことを意味することになる。佐久間[1974]は、マカッサル族の伝統的世界観に潜む例として、結婚に対する観念を次のように述べた。

マカッサル族の社会にあつては、完全な資格を備えた社会成員として認められるのは既婚者のみであつて、未婚の人間は例え十分な年齢に達していようと、又高い地位に有していようと、一人前の社会成員とは認められない[ibid. : 41]。

ラガが上手でないことは、結婚できないことであり、また社会成員として認められないことになる。そのため、少年や青年はセパ・ラガの上達を第一に考えていた。また、それぞれのプレイヤーは、他のプレイヤーより優れようとするため、セパ・ラガは競争的になる。一方で、他人より優れようと「人の機会を奪うこと」が禁止事項として挙げられている。競争的ではあるが、人の機会を奪い合つてはいけなく、と相反する側面を併せ持つ。

一方で、女性はしばしばラガを見学したとされる。セパ・ラガの熟練度が男性の価値を決め、結婚の判断基準となった。南スラウェシ観光案内所 (GEDUNG MULO) で出会った75歳の女性とのインタビューを以下に記述する。

セパ・ラガが上手な人は魅力的でしたか？ (筆者)

ラガが上手な人は、本当に魅力的だった。(75歳女性)

ラガ上手な人とは、どのような人ですか？ (筆者)

テクニックがある人で、その場を盛り上げられる人です。(75歳女性)¹²

だと教えてくれた。また、アセラ・バタラのメンバーで最年少のB¹³は、他のメンバーから「Bは、ラガが上手だから結婚できたんだ」¹⁴とからかわれていた。

¹² 2010年2月15日に筆者が行ったインタビューより。

¹³ Bは、1983年生まれ、27歳(2010年2月現在)、12歳の時にパラガを始める。Aの父が他グループのリーダーである。Bは父から、パラガを習う。

¹⁴ 2010年2月20日に筆者が行ったインタビューより。

第5項 民衆への広がり

ラガの起源や伝播に関しては、Kaudern[1929]を引用している。セレベスへ伝播されたセパ・ラガは、まず貴族社会でのみ実施され、その後民衆へ広がったとされる。マカッサルの王国や貴族社会では、セパ・ラガを練習するのに十分な庭を家に用意しなければならなかった。

セレベスへ伝播されたセパ・ラガは、その後ゴア王国の統治地域へも伝播された。その際、イスラム教の布教と共にセパ・ラガも伝播された。

第6項 技術としての手の使用

この遊びの中では、手や肩、他のメンバーの体を使うことができる。ただし、手のひらでラガを掴むことは禁止されている。具体的な手や肩の使用例は、述べられていない。「他のメンバーの体を使うことができる。」[9]とは、他のメンバーとのコンビネーションなのか、他のメンバーの体を実際に使うのか、は文章からでは定かではない。しかし、挿絵から解釈すると、第4章で詳述されるススンとフォルマシである。



写真 1 親指にラガをのせる

第7項 意味を持つ蹴り方

セパ・ラガの蹴り方の中には、意味を持つ蹴り方がある。これは諺のように、生活の教訓とするものである。しかし、ラガは主に王国で実施されていたので、生活というよりは王国に対する教訓の意味合いが強いと考えられる。意味を持つ蹴り方は、王国の公式行事の儀礼として実施される。次に意味を持つ蹴り方を示す。

「massempe aratiga¹⁵」という蹴り方は、「masempek mappalece」という蹴り方と対になっている。前者の蹴り方は「王国は全ての危険性に対して、いつも注意しなければならない。」という意味を持ち、後者の蹴り方は「会話はいつも気をつけなければならない。」という意味を表す。前者に呼応して後者が蹴られる形式である[8]。

しかし、この蹴り方をどのようなシュチュエーション、つまり就任式、貴族の宴会、結婚式、収穫祭で行われるのか、また観客がどのように受け取ったかはこの文献からは読み取れない。

¹⁵ 蹴り方の名称である。マカッサル語で訳出不可。

セパ・ラガは、sempak¹⁶と belo¹⁷の組み合わせによって構成される。また、belo は、足だけではなく、頭を除いて、手、肘、肩、胸、胃、太腿の動き全てを指す。以下に蹴りの方の種類とその説明を以下に示す¹⁸。

1、sempak Sarring (激しい蹴り、大地への蹴り)

sempak Sarring は地面に向けて足の裏でラガを叩きつけるようにしてラガを蹴る。地面から 3m ぐらいの高さにバウンドさせる。また、この蹴り方とラガの状態によって 2 つの意味に区別される。1 つ目は、選手に対して真っ直ぐにバウンドしたら、プレイヤーのポジションを修正することを意味する。2 つ目は、ラガが傾いてバウンドしたなら、そのプレーを引き継ぐか他のプレイヤーへ順番を与えることを意味する。

2、sempak Biasa (普通の蹴り)

高く蹴る、頭を少し越える高く蹴る。

3、sepak caddi¹⁹ (小さな蹴り)

sepak caddi は、頭を超えない蹴り方である。sepak caddi をもって belo が構成される。つまり、ラガで扱うほとんどが sepak caddi である。

ここで、蹴り方については Sempak Sarring のみが足の裏と地面を利用した蹴りであると述べられているが、体勢などの詳細は述べられていない。Sempak Biasa、sepak caddi はラガの高低によって区別され、足の個所と大勢の問題は述べられていない。また、sepak caddi が belo を構成するとし、セパ・ラガの蹴りのほとんどが sepak caddi である。

第 8 項 遊びの評価

テクニックの評価は、その時のリーダーが下す。評価の観点を以下に示す²⁰。

1、Bajiki anrong sempakna

適切にラガが跳ね上げられている。

2、Caraddeki Angngalle Raga

遊びと規律の雰囲気醸し出す能力がある。

3、Jai Sempak Masagalana

ステップとステップ中の蹴り方。これは belo のバリエーションの 1 つである。

¹⁶ sempak はマカッサル語であり、インドネシア語で sepak を意味する。

¹⁷ belo の意味は不明。

¹⁸ ここでは、マカッサル語が使用されている。辞書に載っていない言葉もあり言葉自体の意味は不明である。カッコ内は、インドネシア語による言い換えを訳出。

¹⁹ sepak caddi はインドネシア語で、sepakan kecil であり、「小さい蹴り」の意味である。

²⁰ ここでは、マカッサル語が使用されている。辞書に載っていない言葉もあり言葉自体の意味は不明である。

「Bajiki anrong sempakna」はラガがミスなく蹴られているか、「Caraddeki Angngalle Raga」は遊びの雰囲気を見る人に伝えられているか、また順を守り人の機会を奪っていないか、3はステップの華麗さ、である。また「Jai Sempak Masagalana」は、難しいステップを披露した人は、他の人に模倣され尊敬されることになる。

第9項 儀礼的要素

ラガは、「伝統的な司祭と王族の前」[11]で披露され、祈りが捧げられる。伝統的司祭は、異装の宗教的職能者ビス (bissu')²¹を指すものと考えられる。伊藤[1990]によると、宗教的職能者は主として王国、貴族に関わるものだったが、インドネシア独立後の王制廃止とそれに続く政治的動乱期のうちに、ほとんど社会的意味を失ってしまったからである。というのは、王国が存在しない近日、神器の多くは王族の管理から博物館や県庁の管理化に移っている。また、ビスの生存者も少ない[ibid. : 65]。

第3節 『PERMAINAN RAKYAT SULAWESI SELATAN』(2001)

本著は、マカッサル州の刊行である。1998年にスハルト政権の崩壊によって、地方分権が進められた。地方分権の一環として新たに刊行されたと考えられる。1979/1980年度版に比べると、同一の内容、例えば名称、起源、蹴り方、評価、などであるが、詳述されている個所もみられる。本節では有益と判断されることのみを整理する。

第1項 名称

ブギス語 maddaga、マカッサル語 akraga が使われている。

第2項 遊びの特徴

芸術とスポーツの要素を融合した民衆の遊びの一つである。この遊びは、プレイヤーの器用さや素早さや敏捷さを必要とする。この遊びは、プレイヤーと観客間、特に若者達の出会いの場になる。

第3項 リーダーの役割

ラガが最も上手い人はリーダーとなり、ゲームの主導権を握る。リーダーは円の中心に立ち、順番通りに参加者にラガを振り分ける。ゲームのスタートはリーダーが、ラガを上投げる行為がスタートの印である。ラガが転がった人から始める。初めの人が決まっているわけではない。

²¹ ビスは宗教的諸儀礼に通じ、かつ経済的にも成功したのは珍しいが王国時代のブギス・マカッサル社会には『ビス』と呼ばれる宗教的職能者がいた。彼らは、王国の儀礼を取り行うための宗教的訓練を経た人々であり、王の権威象徴する祭器を管理し、その儀礼を執行することが主たる任務であった[伊藤 1993 : 174]。

他人より優れていることを記すために、ラガは奪い合ってはいけない。リーダーは選手に直接投げられることもあり、技術の差によって投げる角度や高さに変化をつける。技術があるとリーダーに判断されれば、出来るだけ高く投げられ、技術が低いと判断されればラガが低く投げられる。当然高く投げられれば、ラガのコントロールは難しくなる。

ラガを蹴る順番は、リーダー経由法と順番法の2種類である。前者は、毎回リーダーを経由して、リーダーから各プレイヤーに配球される。後者は、円形に陣取った順にラガを回す。

第4項 民族衣装

ラガを蹴る全ての選手は、ブギス＝マカッサル族の代表的な民族衣装²²を身につけなければならない。だが、帽子の形状はパラガに特有のものである。帽子はパサプー (passapu) と呼ばれ、代表的な民族衣装の帽子の折りたたむ部分を伸ばし糊で固めたものである。パサプーの着用は、「ラガをパサプーに入れる」という新たな身体技法を獲得した。この遊びは、ラガが落ちた時もパサプーに入れてから始められなければならないと考えられている。しかし、この落とすという行為自体は歓迎されない。歓迎されないばかりか、他のプレイヤーに嘲笑される1つの行為でもある。時には、円の中から追放されることもある。



写真 2 パサプー

第5項 実施場所

ブギス＝マカッサル社会では、家を建てるなら家に練習場所を庭に用意する。地面は平らな場所が良く、地面を利用した蹴り方があるため土が多いのは好ましくない。それに、ラガを上方に高く蹴るためそれを妨げる木があるのは好ましくない。

第6項 ブギス社会におけるラガに実践

ブギス社会での maddaga は、円形にプレイヤーが配置され、円の中心にリーダーが入る。リーダーは、Passittak passapu²³と呼ばれる。パサプーは布製の帽子である。パサプーにラガを納めるために、加工を施し全体を丈夫にしなければならない。この遊びの中には、ラガの出し手と受け手という概念は存在しない。全員が遊びのために、その能力やテクニックを披露する。

またこの遊びは、王の前で祈りを捧げられ、王の家族や伝統的な司祭に見られる。いくつかの

²² 鏡味治也 2000 : 88-89

²³ passittak は、sittak に起源をもち「引く」という意味である。passapu は sapu 「ほうき」を起源にもち、「フタ」という意味である。

意味を持つ蹴り方が複雑にからみあっている²⁴。ラガの状態や跳ね返りに意味を与えている。その意味を以下に要訳する。

1、sempek（高く蹴られた垂直の蹴り）

「王国が警戒しなければならない」という意味である。

2、上へ蹴られたラガは、落下する。落下後、そのままに放置される。

本来ならば放置されることはない。しかし、この落下後の放置という時間が、「戦争の影響で弱った国にいる勇敢な人²⁵という」という意味となる。

3、Sempek mappaleca（縦への蹴り）

「口論が発生しないように努力する」という意味をもつ。

4、sempek cenning raga(cenning raga)

「誰かを引きつけること」を意図し、「王が愛人を探している」ということも意味している。

5、longa-longa（座って両足を利用する蹴り方）

ラガを演じる中で、両足を利用しながら座った姿勢で行われる。

蹴った時のラガの状態に意味を付与している事実が示された。しかし、具体的に体をどのように動かすか、これらの蹴り方がどのような状況で披露されるのか、の2点については述べられていない。

第7項 マカッサル社会におけるセパ・ラガ

ブギス社会でも同様、王族や貴族が家を建てる際には、ラガやラガのトレーニングに必要な場所を確保しなければならない。決まった時間で競争の性質をもった遊びを運営する。招かれた貴族は、実際にセパ・ラガする場合もあれば、しない場合もある。

akragaの開始は、プレイヤーは円形に広がり、この中心にはラガに熟練した人は、リーダーとして配置される。その中には、成人も含んでいる。リーダーは、ラガの始まりの合図として、ラガを高く投げられる。リーダーは指導者でもあり、円の中心に陣取る。周りのプレイヤーが失敗したラガを次のプレイヤーに渡すためである。テクニックがない選手の場合は、両手で受け取ることが可能となる。しかし、テクニックがある選手の場合は、可能な限り高く蹴り上げられ、足で直接受け取る。

蹴りの方の種類とその説明は、1979/1980年度版と同じであった。

²⁴ 本章第3節参照。

²⁵ ブギス語で torani。

第4節 本章まとめ

本章では、南スラウェシ島の蹴球遊戯を再構成するために、3つの文献に整理しまとめてきた。Kaudern [1929]は、起源、伝播、分布の問題を扱い、1979/1980年度版と Nonci[2001]年版からは、研究方法に問題が残るものの、マカッサルの蹴球遊戯に関する歴足、社会、文化、身体技法に関する事柄が述べられた。

名称は、年代や民族ごとに異なっていた。しかし、全てに共通して道具 raga とブギス=マカッサル語の siraga-raga に由来している。本論で対象とするパラガという名称は出てこなかった。しかし、名称は違うがパラガと同様のスポーツが 1979/1980年度版と Nonci[2001]には示された。さまざまな名称が存在することになる。

セパ・ラガは国際的交易によって、スマトラ島やマレー半島からマカッサルへ 15、16世紀に伝播された。回数が目的のセパ・ラガは、王国と結びつきセパ・ラガがマカッサル化される²⁶。マカッサル化は、回数が目的のセパ・ラガに3つの機能をもたせるに至った。まず、セパ・ラガは王国と結びつき、ブギス=マカッサル族の神話的世界観を通じた儀礼的機能を獲得する。王国での公的行事で必ず披露され、意味を持つ蹴り方の全てが王国に関連することである。次に王国行事や収穫祭での来賓をもてなすためのアトラクションの機能を持った。最後に男性の判断基準としてのセパ・ラガは、セパ・ラガの熟練度が男性を選ぶときの基準となった。そのためセパ・ラガは、他人より優れていようとし競争的な遊びへと変容した。その後民衆へ広がったとされる。

また、イスラム教の布教を伴い、当時のゴワ王国の支配地域へブギス=マカッサル族のセパ・ラガは伝播された。当時の支配地域からは、今でもセパ・ラガが報告されている。しかし、ススンやフォルマシといった言葉やそれに当たる動きは他の地域で報告されていない。この事実は、ゴワ王国時代にススンとフォルマシが創られなかったことになる。ゴワ王国の支配地域へはセパ・ラガかブギス=マカッサル族のセパ・ラガが伝播されたと考えられる。1979/1980年度版、2001年版でススンとフォルマシの図が示されるが、過去のセパ・ラガを再構成した結果ではなく、当時のパラガを見て書かれたものである判断される。文献で見る限りススンやフォルマシが創られたのは、Kaudern の著書 1929年以降であるといえる。

1979/1980年度版以降は身体技法に関する記述がみられた。手の使用や地面に付けることが技術として認められ、パラガを特徴づけるススンとフォルマシ²⁷と関連するであろう言及がなされた。しかし、最終ページの絵で示されるのみで、詳述されなかった。また、パスプーの着用は、新たな身体技法を生み出した。2001年度版では、座って蹴る身体技法が提示された。また、ブギス族とマカッサル族では、蹴り方と意味の付与に差異が認められた。

セパ・ラガが最も上手い人はリーダーとなり、メンバーの評価、難易度の調整といったゲームの主導権を握る。ラガを蹴る順番は、リーダー経由法と順番制の2種類である。

²⁶ マカッサル化されたセパ・ラガをブギス=マカッサル族のセパ・ラガと呼ぶこととする。

²⁷ 第4章で詳述する。

第4章 現在のパラガ

本章では、フィールドワーク¹で得られたデータを基に、現在マカッサルで実施されるパラガの実態を記述する。

第1節 パラガ概観

第1項 名称

第3章で例示した呼び方は使われず、現在はパラガと呼ばれている。その他に、ラガをするマカッサル人という意味で、マラガ (maraga²) という名称で呼ぶ人にも出会ったが少数であった。パラガは、パラガ実践者や南スラウェッシ観光案内所 (GEDUNG MULO) といった、パラガに関係する人が用いる名称であった。パラガと接点を持たない人は、パラガを知らない人のほうが多数であった。しかし、セパタクローやセパ・ラガのという名を出すと、知っている素ぶりを見せ「セパタクローの起源は、マカッサルのセパ・ラガである。」、「マカッサルのセパ・ラガが、インドネシアのインドネシア全土に広がった。」、「パラガはマカッサルの伝統スポーツである。」と語る人や、名称までは知らないがマカッサルでラガを蹴る伝統スポーツが行われていることを知る人は、非常に多かった。そして、南スラウェッシ観光案内所職員の話によると「パラガはマカッサルを代表するのではなく、南スラウェッシを代表する伝統スポーツである。」³と語った。

マカッサルの伝統スポーツの1つがセパ・ラガであると認識は、多くの人に共有されていた。しかし、それがパラガであるという認識は関係者以外に持っている人はほとんどいなかった。

第2項 調査対象

調査対象はアセラ・バタラ (ASERA BATARA⁴) というグループが行うパラガである。アセラ・バタラのリーダーA⁵ (以下リーダーA) によると、各県にパラガのグループが1つあり、マカッ

¹ 2007年7月13日～8月2日、2010年2月10日～2月26日の計約5週間のフィールドデータに基づく。

² 「maragaのmaは、makassarのmaである。」と教えてくれた。第3章では、marragaが例示されたがスペルは異なる。

³

⁴ ASERA BATARAは、インドネシア語である。Aはasli(本当の)、SEはsepak(蹴る)、RAはraga(籐製ボール)、BATARAは神の意で、「神聖なる本物のセパ・ラガ」となる。(筆者訳)

⁵ アセラ・バタラのリーダーMは、1963年生まれ、47歳(2010年2月現在)である。1976年の13歳の時にパラガを始める。リーダーMは、Daeng Raga(ラガさん)と呼ばれ、パラガといえればリーダーMといわれ、昔からマカッサルに住む人で知らない人は少ないようである。また、1993年にリーダーMは、パラガを披露するために島根と福岡を訪れている。この時、マカッサル市長と2人だったため、ススンやフォルマシを披露することができなかったという。

サル州には4つあるようである。しかし、協会のような組織が設立されていないので、正確な数を把握することはできない。

グループ間の大きな差異は、「ススン (susun) とフォルマシ (forumasi) の組み合わせである。」とリーダーAが説明してくれた。ススンは、人と人とが縦の関係になる。組み体操の要領で、肩の上や2人の組んだ腕の上に立ってラガを扱う。だがフォルマシは、横の関係にある。2人以上が手を繋ぎ蹴ったり、手を交差させたりダンスのような動きをする。

ところが、「ボールの扱い方、足の使い方、手の使い方グループ間の差異はない。」とリーダーAは説明する。手技のバリエーションは少ないが足技のバリエーションは多く、しかも、足技のバリエーションはプレイヤー次第で組み合わせが自由である。したがって、足技は、無限といい組み合わせがある。そのため差異を見出すのは、不可能であるといえる。

アセラ・バタラに、現在、定期的な活動はない。リーダーAがパラガを始めた1970年代後半から現在に至るまで、「活動の場はどんどん減ってきた」とリーダーAは語る。1970年代は、家の周辺でパラガのテクニックを磨いた。けれども、転職や再開発に伴う移動によりメンバーの住居が離れた。そのため、気軽に集まれなくなり「パラガの機会が減少した」、とリーダーAは説明した。

現在、唯一の活動の機会がマカッサル市の大きなイベントである。独立記念日とロサリビーチ祭りでは、各民族が衣装を着て、それぞれの民族文化を披露するパレードが実施される。パレード形式で、パラガも披露されるが、正式な形で実施されることはないという。しかも、出演グループが毎年変更される。最近のアセラ・バタラの出演は2003年である。例外的に何かのイベント、例えば中国の旧正月で、披露することもあるという⁶。このように、日常的と、非日常の2つのレベルにおいてパラガの機会が減少しているのが現状である。

第3項 パラガとカレボシ広場

マカッサル市内には、パラガの像が2体建っている。1つは、マカッサル市のシンボルといわれるカレボシ広場 (Lanpangan Karebosi) の正面ゲートの片側に立っている。もう1つは、ロサリビーチに近い小さな港にパラガ像がたっている。この像は、ススンの場面である。聞き取り調査によると、前者は1970年代に建てられ、後者は2000年に建てられたとされる。両者の像の建設時期を比較すると1970年代には、ススンがまだなかったのかと想像させられる。



写真3 カレボシ広場のパラガ像とラマン

⁶ 2010年2月21日筆者によるインタビュー。

カレボシ広場付近には政府関係の役所が並び、マカッサル市の中心地であり、マカッサルのシンボルといわれている。カレボシ広場はサッカーコート

6面を有する広大な面積を有する。古き良き公園といった趣で、サッカーコートは6面を有するが、グラウンドは未整備である。リーダーAによると「カレボシ広場に行けばいつでも誰かがパラガをしていた」とおいう。サッカーだけではなく、さまざまなスポーツを楽しむ人々の姿をみとることができる。ここではPSM⁷マカッサルの練習が行われることもある。また、正面ゲートのパラガ像の反対には、インドネシアのペレと称されるラマン（Ramang⁸）の巨大な像が並んでいる。タマン・ミニ・インドネシア・インダーのスポーツ博物館のサッカーコーナーでは、ラマンが写真付きで紹介されている。インドネシアにとっても、サッカーといえばラマンであるようだ。南スラウェシ観光案内所で出会った、ラガ博士と呼ばれているA⁹は、



写真 4 小さな港のパラガ象

ラマンもパラガをしていた。パラガをしていたから、サッカーで英雄になれたんだ。ラマンのテクニックはパラガによるものだ。今は全くみられないが、昔のカレボシ広場ではパラガをする人が大勢いた¹⁰。

とラマンとカレボシ広場の話をしてくれた。

ところが、2010年2月に再びカレボシ広場を訪れると、カレボシ広場は、改修工事が終了し、古き良き公園のイメージは一新されていた。イベント開催が可能な屋根付きステージが公園の半分をうめ、あと半分は芝生が敷きつめられた3面のサッカーコートに生まれ変わっていた。地下には、スーパーマーケットと駐車場設置され、複合的な施設が完成した。正面ゲートのパラガ像とラマンの像は撤去されていた。一方で、地下のスーパーマーケット4つの入口に、南スラウェシ4民族の名が刻まれた。パラガとラマン像の行方、撤去された理由は、聞くことができなかった。

南スラウェシ観光案内所に置かれているパンフレットの表紙は、そのほとんどがパラガの写

⁷ PSM マカッサルは、インドネシアで古豪と呼ばれるチームである。2005年にインドネシアの代表として、AFCチャンピオンズリーグで横浜F・マリノスと対戦している。[sport snavi.com <http://sportsnavi.yahoo.co.jp/soccer/jtoto/2005/data/acl/index.html> 2010年12月20日参照]

⁸ Ramang (1929-1987) は、ブギス人でマカッサルを本拠地とするPSM所属でしていた。かつて、インドネシアを代表するサッカー選手である[楠田2006:59]。

⁹ Aは1940年生まれ、70歳。現在は、観光案内所で開かれる会議で助言を頼まれる人物である。

¹⁰ 2010年2月15日南スラウェシ観光案内所にて筆者によるインタビュー。

真である。パラガの写真でもススの写真が選択されている。しかし、このパンフレットは、更新されていないようである。

第4項 パラガの逸話

フィールドワークにて、パラガに関する説話を聞くことができた。次に示すのは、リーダーAが、「南スラウェシ州に住む者なら誰でも知る」という説話である。ゴワ王国の王子とボネ王国の王子が結婚相手を賭けてセパ・ラガ対決をした説話を以下に引用する。

ハサヌディン¹¹の義弟のアル・パラッカ¹²は美女マイパデュオパーティの結婚相手候補であった。もう一人の候補ラトゥムシェンとパラガ勝負を行って、勝った者が結婚できるということになった。アル・パラッカは、ラガを蹴って家の屋根を越して反対側へ正確に蹴ることができた。ボールが浮いている間に自分も反対側へ移動し何度も行った。対してラトゥムシェンは、彼女がいる部屋にラガを蹴りこみ、ボールが彼女のお腹の中にはいって病気を治した。そして、ラトゥムシェンは彼女と結婚しゴワの王になった。アルパカは、追放となりボネ島の王になった [2010年2月20日筆者によるインタビュー]。

この話は実在の人物であるハサヌディン、アル・パラッカ、ラトゥムシェンの3人が登場する。リーダーAは師匠Nに何度もこの話を聞かされ、「ブギス族に負けてはいけない。」と語るようである。話の中では、ゴワの王ラトゥムシェンが勝つことになっているが、歴史上ではオランダ軍と組んだボネのアル・パラッカがゴワ王国に勝利する。

また、ラガを蹴る理由についての説話を以下に述べる。

ある7人兄弟¹³の末弟が家をでた。身代わりにロタンで作られたラガを1個置いていった。ラガの語源は *nigaraga-raga* で「下のものが上のものに愛される」を意味していた。そこで、末弟であるラガを落とさないように6人の兄弟が守らねばならない[2010年2月20日筆者によるインタビュー]。

左回りでラガが蹴られなければならないと教えてくれた。

第2節 道具と遊び方

¹¹ オランダ軍と戦った国民的英雄。マカッサルの国立大学、空港の名にハサヌディンが使われている。

¹² ゴワ王国は、スピールマン将軍率いるオランダ東インド会社軍とボネ王国の王子アル・パラッカ率いるブギス軍との連合軍とのマカッサル戦争（1666-1669）に敗れる。

¹³ ブギス族やマカッサル族では、男は7人兄弟と考えられている[大林 1985 : 25]。

第1項 道具

籐を割いて編まれたボール、ラガを使用する。直径約15cmが一般的であるが、手製のためそれぞれに差異はある。タイやマレーシアのラガは1重が多いが、パラガで使用されるラガは3重構造になっている。タマン・ブダヤ(Taman budaya)の所長によると、ラガの3重構造の意味を次のように語ってくれた。

ラガは入れ子状の3重になっていた。これは宇宙を象徴していた。マカッサルの信仰する所では、世界は3重であるためである。また、ラガは4本のロタンから編まれているが、それは世界が完全であることを意味していた[2010年2月20日筆者によるインタビュー]。

「マカッサルの信仰する所では、世界は3重である」との語りにブギス＝マカッサル族の世界観が見て取れる。これは、ブギス＝マカッサル族の3界観¹⁴であると考えられる。3界観は、ブギス＝マカッサル族の神話的世界観¹⁵の1つとして、しばしば指摘されてきたことである。伊藤[1990]の研究をまとめると次のようになる。

C・ペラルスはこの叙事詩の分析から天上界、中界、地下界＝水界を基本構造とし、さらに天界と地界とは神々の領域として、人間の住処となる中界は、その初めは「空」として描かれている。そして、天界の最上界から遣わされた最高神パトトエの長子バタラ・グルが、地上の最初の統治者となるのである[Peiras1985:]。

マカッサル化への過程で、ラガが3界観の世界観と見立てられ精神世界を表すことになる。

3重ラガと1重ラガの物質的特長を述べると、3重のラガはバネのように籐がしなり、約2cmは押すことができるクッション性の高いラガである。それに比べセパ・ラガで使用されるラガは1重でクッション性はなく、非常に硬い。

公式用と練習用のラガが区別される。公式用のラガに対しては、祈りが捧げられ、神聖なものとして扱われる。祈りの言葉は、口頭伝承でリーダーにしか伝えられない。内容は、「ラガが体から離れないように」とリーダーAは教えてくれたが、どのような言葉が使われているのかは秘密にされた。

第2項 遊び方

始める前に、パフォーマンスの打ち合わせを行う。主にフォルマシとススの順番についてリーダーが決定する。

¹⁴ 3界観とは、天上界、中界、地下界＝水界をあらわしている

¹⁵ ラ・ガリゴ(La Galigo)といわれるスラウェシ島各地に伝わる神話的叙事詩が、ブギス＝マカッサル族の神話的世界観を形成しているといわれている[佐久間1991:439]。また、これは通常ブギス族の神話と見られがちであるが、マカッサル族もこれを自己の神話として理解している[佐久間1974:44]。

前、リーダーはラガに対して祈りを捧げる。そして、一列に並び、パフォーマンス場へ入場する。そのままメンバー全員が一列に並び観客に対して一礼する。その後、男性 6~8¹⁶人円状に広がる。パフォーマンスが始まる。

まず、再びリーダーがラガを額に付け祈りを捧げる。その後、左回りでメンバー全員にラガを回し、ラガを額に付け祈りを捧げる。メンバー全員に聞いても、祈りの言葉は秘密であるが、話の内容から「ラガが体から離れないように¹⁷」というのは全員に共通していた。

全員の祈りが終わると、パフォーマンスが開始される。リーダーが蹴り上げるとゲームの開始の合図になる。ラガを受けたメンバーが、立ち位置から円の中心へ向かい、パフォーマンスを披露する。

基本は左周りである。しかしパラガは、高度なテクニックを披露するため、全てが成功するとは限らない。そのため、ラガは不規則に飛ぶことが多い。そうすると、順番は臨機応変に対応する。左周りの順番を遵守しなければならないわけではない。だが、最後はリーダーと決まっている。したがって、ラガが転がった所にいたメンバーが順に行う。ラガを受けたメンバーは、ラガを片足で扱いながら中心に向かい、中心でテクニックを披露する。個人パフォーマンスは、各個人が得意なパフォーマンスを行うため個人に任される。アセラ・バタラの場合、それぞれ個人が得意技を持っている¹⁸。

個人パフォーマンスの終了の印として、パサプーにラガを入れる。そのまま、パサプーを利用して、次の人にパスをする。パサプーが、パフォーマンスの終了を意味する。

パフォーマンスの後、パス交換する。形式上、個人のパフォーマンスが全員終了した後にパス交換は行われる。セパ・ラガ主たる目的のように、回数を目的とするわけではない。地面についてもいっこうに構わない。ラガを高く蹴り上げて、さまざまな蹴り方や肘を使用し、そのほとんどがアクロバティックな蹴り方によりパスを交換する。

次に、フォルマシに移る。始める前に順番を決定している。フォルマシからススンへと、流れるように移る。ススンの内容も同様に、始める前に順番は決定している。詳しいことはわかって



写真 5 退場のシーン。これは結婚式の時のみ行われる。ススン・サトゥの①である

¹⁶ 2回のフィールドワークで、それぞれで人数が異なった。また、聞き取りによると7人が正式の人数である。

¹⁷ インドネシア語で「dijiwai」と表現される。

¹⁸ 計3回拝見したが、メンバーのそれぞれが毎回同じテクニックを行っていた。

いないが、披露する場所、つまり結婚式や竣工式などによって内容を変える。例えば、結婚式の入退場はススンでおこなわれる、などである。

第3節 パラガの特徴

蹴球遊戯の先行研究の1つである『民族遊戯大事典』[1998]や『SOME GAMES OF ASIA』[1974]に記述されるセパ・ラガを比較対象として、パラガの特徴を明確にする。その理由としては、セパ・ラガと同様の形態が東南アジアにおいて広く分布するため、基準として妥当であると判断される¹⁹。以下にパラガの特徴を示す。

- ① 手や腕の使用が技術の一つとして認められる。手のひら、甲、肘、肩、指先(親指や人差し指でラガを弾く、止める、乗せる)を使用する。
- ② ススンやフォルマシといったコンビネーションがある。ススンは、人と人とが縦の関係になり、ラガをコントロールする。だが、フォルマシは、横の関係になる。2人以上が手を持ち合い、足でボールを扱う。
- ③ パサプーを着用する。これは全ての技に共通し、重要な要素である。全てのパフォーマンスの区切りに、パサプーにラガを入れる。そして次の人に回す。コントロールミスをしないう限りはこの通りである。
- ④ 地面にボールをつけることを認める。主に座位のパフォーマンス時に見られる
- ⑤ 主な足の使用箇所が、趾骨付近である。

以上の5点である。次に、①～⑤の特徴を詳述する。⑤に関しては第5章で詳述する。

第1項 手や腕の使用

手、肘、肩を使用し、乗せる、弾く、挟むに分類できる。

○乗せる

手を地面と垂直に保ち、反り返った親指にのせる。手を地面と垂直に保ち、親指を人差し指と同じ位置まで下げる。下げた時にできる窪みにラガを乗せる。肘を屈曲させ、手で自分の肩を触り、肘を地面と並行を保つ。肘の先にラガをのせる。腕を伸ばし、肘の裏の窪みにラガをのせる。肩は使用しない。手の平に置き、足の間を潜らせる。また、右手にのせた場合、右手はラガを置いたまま背中を通過させ腰あたりで、上方へ投げる。

○弾く

手の平側と甲側で交互にラガを弾く。肘の側面を転がし、肘で弾くというより押し出す要領である。拳を握った手の親指中手骨で、手で挟んだラガを弾く。

○挟む

前腕橈尺関節の回内で手の平が地面と平行の位置で保ち、この状態のまま両人差し指側面で挟む。

¹⁹ セパ・ラガやタクロウというふうに名称は異なるが、蹴球遊戯の形態や目的は同じである。

人差指で挟んだ状態のまま、片方の人差指を肘の所までスライドさせてラガを保つ。

第2項 ススン(susun)

susun はインドネシア語の動詞で「積み重ねた」という意味である。ススンの名称は、susun の後に数字が入る。基本は、2人から6人までの形がある。ススンは、文献上1929年には見られず、1979/1980年度の文献には見られる

また、ススンはアセラ・バタラのメンバーに聞くところによると、「一番の見せ場」であるという。特に、ススン・ティガはススンの中でも一番の見せ所である。

また、マカッサル観光案内所の無料パンフレットの表紙には、ススンの写真ばかりである。ススンの名称と基本の形は以下の通りである。

ススン・サトゥ (susun satu²⁰) : 下段1人、上段1人

ススン・デュア (susun dua²¹) : 下段2人、上段1人

ススン・ティガ・デュア (susun tiga dua²²) : 下段3人、上段2人

ススン・ティガ・デュア・サトゥ (susun tiga dua satu) : 下段3人、中段2人、上段1人

ススン・デュア・デュア・サトゥ (susun dua dua satu) : 下段2人、中段2人、上段1人

ススン・ティガ (susun tiga) : 下段2人、上段1人 (後述するが、ススン・ティガは対になる)

上記の形を基礎に、ススンの種類を以下に記述する。

ススン・サトゥ : ①下段の肩の上に1人が座る。②肩膝立ちした下段の膝に座る

ススン・デュア : ①下段の2人がお互いに正面を向き、両手を肩に置き合う。その肩の上に立つ。②下段の2人が両手を繋ぐ。片側の手を軸足の足場に、もう一方は腰掛けになるように、お互い肩の位置まで上げて保つ。上は、バランスを保つために両手を下段の肩に置く。③下段が正面に向き、手を組む。上段は、組んだ手の上に蹲踞の姿勢で乗り、バランスをとるために下段の肩に手を置く。

ススン・ティガ・デュア : ①下段3人が肩を組み、扇型に立つ。上段に2人が立ち、1人がラガを蹴る。もう1人は保持者のバランスを保つために肘や肩を貸す役割が与えられる。

ススン・ティガ・デュア・サトゥ : 下段3人は、円形になり肩を組む。下段の上にススン・デュアの②がそのまま乗る。

²⁰ satu (サトゥ) はインドネシア語で、数字の「1」である。

²¹ dua (デュア) はインドネシア語で、数字の「2」である。

²² tiga (ティガ) はインドネシア語で、数字の「3」である。

ススン・ティガ：ススン・デュアの②と同じではあるが、その横にサポートが1人つく。

ススンの上段のラガ保持者は、バランスをとることが重要である。というのは、上段は不安定で、それも細かいラガのコントロールが要求されるためである。下から投げられたラガを足で直接受け取り、ラガをコントロールするため体勢を作り出すことが重要である。例えば、ススン・デュア②のように、軸足が安定し、腰が支えられた状態である。また、ススン・デュア③は軸足が安定し、手で下段の肩を持ち体勢が保たれる。この条件が満たされない、ススン・サトゥやススン・デュア②は、同じススンを並列させ、ラガの保持者同士が肩を使用しバランスをとる。

第3項 フォルマシ (formasi)

フォルマシ (formasi)

フォルマシは、ススンとは違い、横の関係になる。2人以上が手を持ち合い、ボールを扱う。それゆえに、フォルマシに関わるメンバーは、全員が地面に足をつける。以下に、フォルマシの基本の形と名称は以下のとおりである。

フォルマシ・デュア：2人がお互いに正面を向き合って、手を握る

フォルマシ・ティガ：3人で円形に立ち手を握り合う

上記の形を基礎に、フォルマシのパターンを以下に記述する。

フォルマシ・デュア：①2人がお互いに正面を向き合って、手を握る。ラガコントローラーを中心として、ラガを持たない者は手がほどけないように回る。②1人は足を片幅よい広めに開き膝を少し曲げて構える。少ラガ保持者は、その膝に座るようにして（実際には座らない）、ラガを蹴る。

フォルマシ・ティガ：フォルマシ・デュアに1人加えて、3人で回る。

フォルマシ・デュア①とフォルマシ・ティガは、手を繋いでいるため足を使うパフォーマンスのみである。しかも、パサプーにラガを納めて、次の技へという過程がここではおこなわれない。しかし、フォルマシ・デュア②の場合は、パサプーにラガを納める。

ススンとフォルマシに関わらないメンバーは、その周りで踊っている。空手の正拳突きのような動きも見られる。そ



写真 6 フォルマシ・デュアの②

れに、肘でラガを打つ動きを総称して、やリーダーAは、「パラガの動きは、

ブンチャック・シラット²³の動きで、パラガができる人間はシラットもできる」と説明する。しかし、ブンチャック・シラットを本格的に習った者は一人もおらず、シラットに関する知識も

乏しい。ただ、動きを少し知るのみで断片的な動き、例えば正拳突きのような動きを模倣しシラットと呼んでいる。



写真 7 ススン・ティガ・デュア・サトゥ

第3節 本章のまとめ

本章ではフィールドワークによるデータから、現在行われるパラガを再構成した。詳細は、本章で記述した通りである。ススンやフォルマンがいつから始められたのかは、フィールドデータからは判断することはできなかった。

しかし、名称や第3章の蹴り方の説明や蹴り方の意味の所では、マカサル語やブギス語で説明されていた。しかし、ススンやフォルマンは、インドネシア語である。これは、インドネシア語教育がスラウェッシ島へ及ぼした影響である。つまり、言語教育の普及後に創られた可能性を示唆するかもしれない。

次章では、身体技法の記述からススンやフォルマンの成立課程を明らかにする。

²³ 空手に似た伝統武術である。シラエットまたはパンチャ・シラット (pancak silat) の演武は緩急をとりまぜた手足の動きの優美さと力強さを示す様式化されたスポーツとなっている[富沢1998 : 415]。

第5章 蹴り方の比較

本章では、第3章、第4章論じた内容を踏まえ、趾骨での蹴り方は、立位、座位、フォルマシ、ススン全ての態勢で使用される。この蹴り方は、東南アジアに見られる類似の蹴球遊戯を概観しても非常に珍しい。趾骨での蹴り方を明確にするために、セパ・ラガの蹴り方を比較の対象とする。

第1節 セパ・ラガの蹴り方

第1項 セパ・ラガの特徴と道具の特徴

セパ・ラガの蹴り方の特徴について述べる前に、セパ・ラガ（タクロー）という遊戯と遊戯に関わる道具の特徴について言及する必要がある。セパ・ラガは、第1章で定義したように、腕と手以外を用いて「地面にラガを落とすことなく如何に長く蹴り続けるか」を目的とする。数人の男が直径5m程度の円になって腕と手以外の全身、頭や胸や太腿を用いてラガを回していく。

セパ・ラガは、他のグループと競うか同グループ内での記録更新を目指すため、グループ内で競うことはしない。むしろ、同グループは協力すべき仲間である。回数を増やすためにラガの保持者だけではなく、被保持者がラガを扱い易いようにラガを送らなければならない。このことは、目的達成に不可欠である。そのために、足の中でも面積の広く骨の隆起が少ない内側が主に用いられると考えられる。足で球体を扱うセパ・タクローやサッカーにおいても、ボールの正確な扱いが要求される場面では足の内側が用いられることが多い。サッカー入門書の導入部分では、インサイドキック（足の内側）について以下のような説明がなされる。インサイドキックは「正確性抜群のキックを生み、トラップでもっとも多用される、サッカーには必要不可欠なポイント」[木村監修 2008 : 12]述べられている。セパ・タクローを観察する限りは、正確なボールの扱いが要求される場面ではサッカーと同様であるように思える。例えば、スパイクを打つためのトスやスパイクを受けるレシーブは、主に足の内側が用いられる。前者は正確なボールの扱いが要求され、後者は強烈なボールを受け止めることが要求されている。球体を足で扱う際、正確さが要求される場合は足の内側が使用されるのは自然と考えて間違いないようである。

次に主たる道具であるラガの特徴について述べていく。セパ・ラガで使用される道具は、ラガのみである。裸足で蹴る場合もあれば、そうでない場合もある。ボールを作り方によってカテゴライズした寒川[1991]によると、籐を乾燥させて編まれるラガは「編み玉」系に属する。また、ラガは小さく軽い。大きさは手作りのためさまざまであるが、セパ・タクロー用ボール⁷⁶とさほど変わらないように思える。また、表面は非常に硬い。

⁷⁶ セパタクローのボールは、プラスチック製で170～190g、周囲40cmである。

第2項 セパ・ラガの蹴り方

小さく軽いラガは、コントロールが難しく適切な個所に当たらなければ意図しない方向にラガは向かう。参与観察を行った筆者の感想は、「ラガを扱うのは非常に難しく、誤魔化することができない」である。足の内側で蹴ると限定して、ラガとサッカーボールの蹴る感覚を比較する次のようになる。ラガはサッカーボールに比べて、正確にラガを扱える足のポイントが小さい。しかしサッカーボールは大きい。ポイントが大きいためサッカーボールは「誤魔化し」やすいという感覚を得た。

骨が隆起した箇所、例えば甲などで蹴ればラガを正確に扱えるポイントがさらに絞られ、難易度が増す。また、表面が固いため骨が隆起した甲などで蹴れば痛くて蹴ることができないのではないかと予想される。実際、筆者が初めてパラガを経験した時、次の日足の甲が腫れる経験をした。裸足でラガを蹴る体験が初めてだったのも一つの原因である。それ以上に、サッカーの基本練習の1つであるリフティングと同じ要領でラガを蹴ったのが主な原因であると考えられる⁷⁷。

足の内側でラガを蹴る動作は、股関節を外旋・屈曲、膝関節の内旋、3つの動作から成り立っている。また足の内側でラガを蹴る動作と連動して、バランスをとるために（軸足が左の場合）骨盤の左側方傾斜と膝関節の屈曲が同時に起こる。膝関節の屈曲がおこる、つまり地面に圧力をかけることになる。これら一連の動作を「セパ・ラガの蹴り方」と呼ぶ。セパ・ラガの蹴り方の特徴として、連続して蹴る場合は一度地面に足を着けてから再び同じ動作を繰り返すことが多い。連続して蹴ることができないわけではないが、非常に窮屈で素早い動きはできないと思われる。

これまでにみてきたように、セパ・ラガの蹴り方は、目的を達成するために小さくて軽いラガを正確に扱うための蹴り方であるといえる。

第2節 セパ・ラガの蹴り方の変容

第1項 趾骨での蹴り方

パラガで最も用いられる蹴り方は趾骨、つまり足の指の付け根から指全体を用いての蹴りである。この蹴り方は、セパ・ラガの中ではほとんどみられない。また、サッカーの中においてはインステップ（いわゆる足の甲）に近いが綿密いと異なる。リーダーMによると、彼がパラガを始めた1970年代から、趾骨での蹴り方が主たる蹴り方でセパ・ラガの蹴り方ではないという。



写真 8 パラガのヒットポイント

⁷⁷ 2007年7月

パラガが文献で確認できるのが、1979/1980年度である。つまり、マカッサル化したセパ・ラガからパラガへの変容で蹴り方は、変容していないことになる。そうすると、マカッサル化かその後の発展の過程で、趾骨での蹴り方が生まれたことになる。

趾骨での蹴り方は、それだけではラガを正確にコントロールすることはできず、趾骨のヒットポイントに微妙な工夫がみられる。それは、繊細な身体技法といえる。リーダーAは「指を広げていることが重要である」と説明する。アセラ・バタラのメンバーは皆、指を広げてラガを蹴る。筆者自身もリーダーAから指導を受けた際、この点をしばしば指導された。それに加え、メンバーはあまり意識していないがよく観察すると「足趾の屈曲」、「足の外反」、この2点が重要である。この2つの動きによってパラガのヒットポイントは、平らになる。「足趾の屈曲」、「足の外反」、「足の指を広げる」の3つを連動させることで、パラガの蹴り方で些細なラガの扱いを可能にする。

第2項 蹴り方の変容

第3章でセパ・ラガがスラウェシ島へ伝播され、マカッサル化の結果3つの機能をえたことはすでに論じた。パラガの中ではセパ・ラガの蹴り方はあまりみられないことから、現在の蹴り方（趾骨を用いた蹴り方）は、なんらかの影響の結果獲得されたと考えられる。セパ・ラガのマカッサル化に伴う変容は、物質文化、目的の2点の変容をもたらした。この3つの要因が複合的に作用し、セパ・ラガの蹴り方が変容したと考えられる。しかし、資料の制限もあり変容の決定的要因や過程については述べることができない。そのため、変容の要因の可能性を述べるに留まる。

マカッサル化で最も大きな変容は、物質文化、目的の2点である。物質文化は、ラガの3重構造への変容と民族衣装の着用である。目的は、回数からパフォーマンスへと変容した。これらが、趾骨での蹴り方が生まれたと考えられる。

ラガの3重構造への変容は、クッション性をもたらし趾骨でラガを蹴ることを容易にした。また、民族衣装の着用は、セパ・ラガの蹴り方を難しくさせた。ブギス=マカッサルの民族衣装は、非伸縮素材で、膝を覆うものがほとんどである⁷⁸。膝を覆うということは、股関節の外旋・屈曲を妨げられる。蹴れないことはないが、連続で蹴ることは非常に難しくなる。しかし、趾骨での蹴り方は、この股関節の屈曲と同時に膝関節の伸展によって蹴る。一度蹴ると、股関節の屈曲のまま固定し、膝関節の伸展のみでラガを蹴ることが可能となる。趾骨での蹴り方は、一度膝を固定すれば、あとは最小限の動き、膝関節の伸展のみでラガを蹴り続けることができる。つまり、趾骨での蹴り方では動きを制限する民族衣装⁷⁹もほとんど邪魔にならない。

王国で行う儀礼と結びついたセパ・ラガは、民族衣装が義務付けられた。推測の域をでないが、民族衣装が制限する中で最も動き易い最適な動きを志向した結果、趾骨での蹴り方が生まれたと

⁷⁸ サッカーやセパ・タクローのユニフォームは、膝を覆うものはほとんどない。また、素材は伸縮性である。

⁷⁹ 非伸縮素材で作られたパラガの民族衣装は、膝を覆い、膝や股関節の動きを制限する。

考えられる。また、回数が目的であったセパ・ラガは、宴会でゲストを楽しませるパフォーマンスへと変わった。一方でセパ・ラガの上達が成人の印であるとされ、セパ・ラガの上達が男性性を象徴するようになった。これらの物事は文献やフィールドワークにより事実であるように思えるが、その過程は文献により確認できず前後関係は推測の域をでない。しかし、パフォーマンスへと変容したラガは、他人より優れようとする心理は容易に働く。それが成人の証明となり、結婚の条件ともなると尚更である。上述したように、セパ・ラガの蹴り方は3つの動きから成り、連続して蹴ることは難しい。しかし、趾骨での蹴り方は2つの動きから成り連続して蹴ることも容易である。リーダーMによると、「ミスなく素早くテクニックを披露する」⁸⁰ことがいい評価であるという。また、セパ・ラガの蹴り方については「使わないことはないが、使いにくい。用いると連続して蹴ることが難しくなる」⁸¹と語った。この語りを証明するようにリーダーMはパラガの最中、下の民族衣装を気にする素振りを見せる。時には、衣装を膝の上までまくり上げることもある。

資料的制限から、セパ・ラガの蹴り方の変容過程を明らかにすることはできない。しかし現段階では、目的とラガの変容、民族衣装の着用が契機となり、セパ・ラガの蹴り方から趾骨での蹴り方へと変容したと考えられる。

第2節 ススの創造と趾骨での蹴り方

第1項 ススと蹴り方

本論第3章、4章で考察したように、マカッサル化したセパ・ラガが、当時のゴワ王国の支配地域へ伝播された。しかし当時の支配地域からは今でもセパ・ラガは報告されているが、ススンやフォルマシといった事例は報告されていない。この事実は、ゴワ王国時代にススンとフォルマシが創られなかったことになる。また Kaudern [1929]の文献でも言及されていない状況を見ると、ススンとフォルマシが創られたのは、1929年以降 1979/180年度までの期間といえる。また、ススンとフォルマシがインドネシア語である点を鑑みると 1965年以降という可能性もあるだろう⁸²。

ススンに関する筆者の体験を以下に記す。

筆者が、ススン・デュア・サトゥを体験中、サッカー経験者⁸³といえども不慣れな体勢と蹴りなれぬラガのため、まともにラガを操れず、サッカーの基礎とされ多用されるインサイドキック（本論では内足）を使用していた。それがリーダーMの目にとまり、「ススンでは、その蹴り方はしない。できたとしても下段が大変だから良くない。それだとあまり

⁸⁰ 2010年2月筆者によるインタビューによる。

⁸¹ 2010年2月筆者によるインタビューによる。

⁸² スラウェシ島でのインドネシア語教育は1965年以降本格的に行われる[西村1999:207-215]。

⁸³ 10年間（12歳～22歳）を有し、全国レベルの大会に参加する。そのため、足で球体を扱う術は心得ている。

できないだろ。」と注意され、問われた。なぜ使われないのかと問い続けたが、明確な答えは返ってこなかった。「それ以外したことがなく、今まで見たこともない」との答えが返ってきた[2010年2月]。

ススンの上段でセパ・ラガの蹴り方をするのは、実践者の立場からも否定的に語られ、「今までススンで見たこともない」と語っている。ススンの上段は非常に不安定で窮屈である。セパ・ラガの蹴り方は動作が大きく、蹴る度に軸足には体重がかかる。それに、民族衣装の着用は、動作に制限を与え股関節の外旋・屈曲に制限を与えることになる。

また、第4章で述べたようにススンでは、パラガの蹴り方で行われる。実践者は、その理由を「下段に負担がかかる。」、「ススンでセパ・ラガの蹴り方を見たことがない。」と語った。

この理由を、上述した両者の動作から考察すると、パラガの蹴り方は、最小の動きで、しかも「足趾の3つの動き」によって、ラガを正確に扱うことが可能となる。そして、セパ・ラガの蹴り方がパラガの中に存在する事実から、趾骨での蹴り方を前提にススンが創られたと考えられる。

第3節 本章のまとめ

「趾骨での蹴り方」と「セパ・ラガの蹴り方」の特徴は、遊戯の特徴と物質文化と遊戯の目的との関係を趾骨での蹴り方通して明らかになった。

セパ・ラガのマカッサル化によりラガと目的の変容が、「趾骨での蹴り方」を生んだ。つまり、趾骨での蹴り方は、物質文化に規定され、目的を達成するために変容したといえる。そして、パラガの蹴り方とセパ・ラガの蹴り方を比較すると、蹴る動作の大きさの違いが挙げられ



写真9 パラガの蹴り方でラガを蹴る（ススン・デュア）。この動作の違いがススンやフォルマを成立させた理由である。この動作の違いは、実践者から言葉で表現されることはなかったが、筆者との会話から感覚的に理解しているように感じられた。そして、セパ・ラガの蹴り方がパラガの中に存在する事実から、趾骨での蹴り方を前提にススンが創られたと考えられる。

第6章 結論

本研究は、パラガの実態を明らかにすること、パラガを特徴づけるススンとフォルマシが成立した理由を身体技法の記述とその比較を通して考察してきた。本研究で行われた検証が不十分であることを承知で、本研究の目的を達成すべく最後に整理してみたい。なお、パラガの実態については、本論3章、4章を参考にして頂きたい。

セパ・ラガのマカッサル化

13-14世紀に成立したとされるゴア王国の国際的取引を背景として、スマトラ島、マレー半島から15-16世紀にセパ・ラガがマカッサル半島へもたらされた。その後、ゴワ王国やブギス=マカッサル族の神話的世界観と結びついてセパ・ラガのマカッサル化がおこる。マカッサル化によって3つの機能を持つに至った。

まず、セパ・ラガは王国と結びつき、ブギス=マカッサル族の神話的世界観を通じた儀礼的機能を獲得する。次に王国行事や収穫祭での来賓をもてなすためのアトラクションの機能を持った。最後に男性の判断基準の機能である。また、ブギス=マカッサル族の世界観にみられる3分観的世界観とラガが結びついて、が誕生した。3重構造のラガは、物質的にみてもクッション性に優れたラガとなった。

また、イスラム教の布教を伴い、当時のゴワ王国の支配地域へブギス=マカッサル族のセパ・ラガは伝播された。当時の支配地域からは今でもセパ・ラガが報告されているが、ススンやフォルマシといった事例は他のインドネシア地域では報告されていない。この事実は、ゴワ王国時代にススンとフォルマシがなかったことになる。ゴワ王国の支配地域へはセパ・ラガかブギス=マカッサル族のセパ・ラガが伝播された。1979/1980年度版、2001年版でススンとフォルマシの図が示されるが、過去のセパ・ラガを再構成した結果ではなく、刊行された当時のパラガを見て書かれたものである判断される。文献で見る限りススンやフォルマシが創られたのは、Kaudernの著書1929年以降であるといえる。

趾骨での蹴り方とセパ・ラガの蹴り方

趾骨（足の指全体）でラガを捉える。これを「パラガのヒットポイント」と呼ぶ。「パラガのヒットポイント」で股関節の屈曲と同時に膝関節の伸展によって蹴る蹴り方を「パラガの蹴り方」と定義した。パラガの蹴り方は、3重構造のラガという物質文化に規定され、目的を達成するた



写真 10 3重構造のラガ

めに合理的な蹴り方を獲得したといえる。

一方で、内足を利用するために股関節を外旋・屈曲と同時に、膝関節の内旋によって、ラガを蹴る動きの総称を「セパ・ラガの蹴り方」と定義した。セパ・ラガの蹴り方は、表面が非常に硬いラガという物質文化に規定され、目的を達成するために合理的な蹴り方を獲得したといえる。

ススンの創造

両者の動きの違いは、蹴る動作の大きさの違いである。この違いが、ススンとフォルマシを生んだ。もし、パラガの蹴り方ではなかったら、ススンとフォルマといった態勢は創造されなかったであろう。セパ・ラガの蹴り方が、最小の動きで、しかも「足趾の3つの動き」によって、ラガを正確に扱うことが可能である。「パラガの蹴り方」が窮屈な状態でもラガを正確に扱えることができるために、ススンやフォルマシのような不安定な体勢があえて創造されたと考えられる。

引用・文献目録

日本語

- 青木保編. (1997). 「もの」の人間世界. 千代田区: 岩波書店.
- 綾部恒雄他編. (1995). もっと知りたいインドネシア第2版. 東京都: 弘文堂.
- 石井浩一. (2002). インドネシア民族スポーツ研究の現状と課題. 『体育学研究』.
- 石井浩一. (2006). インドネシア伝統スポーツツフェスティバルの一考察. 『松山大学論文集』 pp25-39
- 石井浩一. (2001). アジアのスポーツ文化に及ぼした植民地主義の影響. 『2001年度研究助成金 研究成果報告書』 pp63-72
- 伊藤眞. (1990). 「子ども」の誕生-南スラウェッシン・ブギス族の出産儀礼. 人文学報 no.219. pp63-81
- 伊藤眞. (1992). 南スラウェッシンのイスラム地域におけるキリスト教伝道の一断面. 人文学報 no.232. pp75-104
- イ・ワヤン・バドリカ 石井和子監訳. (2006). インドネシアの歴史. 千代田区: 明石書店.
- 内堀基光、山下晋司. (2006). 死の人類学. 文京区: 講談社.
- 馬淵東一. (1974). 馬淵東一著作集第2巻. 文京区: 社会思想社.
- 梅棹忠雄監修. (2002). 【新訂増補】世界民族問題事典. 東京都文京区.
- 太田好信編. (2005). メイキング文化人類学. 京都市左京区: 世界思想社小川忠. (1993). インドネシア 多民族国家の模索. 千代田区: 岩波書店.
- 大林太良. (1985). シンガ・マンガラランジャの構造. 東京都: 青土社.
- 大林太良他編. (1998). 民族遊戯大辞典. 千代田区: 大修館書店.
- 鏡味治也. (2000). 政策文化の人類学-せめぎあうインドネシア国家とバリ地域住民-. 京都市左京区: 世界思想社.
- 加藤剛. (2004). 変容する東南アジア社会—民族・宗教・文化の動態. 東京都文京区: めこん.
- 倉石哲. (2007). 身体技法と社会学的認識. 京都市左京区: 世界思想社.
- グルーパウエル 清野謙次譯訳. (1944). セレベス民俗誌. 東京都: 小山書店.
- クンチャラニングラット編. (1980). インドネシアの諸民族と文化. (加藤剛他訳, 訳) 文京区: めこん.
- 後藤乾一編. インドネシア【揺らぐ群島国家】.
- 佐久間徹. 1979. マカッサル族における家屋様式と人間関係について. 『南方文化』. 第6号. pp207-216
- 佐久間徹. 1974. マカッサル族における家屋のシンボリズム. 南方文化. 創刊号. pp31-45
- ジョン・D・レグ. 佐久間徹訳(1984). インドネシアの歴史と現在. 東京都: サイマル出版会.
- 鈴木治朗他監修. (1988). 社会人類学年報 VOL-14 1988.
- 松井和久. (2002). スラウェッシンだより. 千葉市.

- 寒川恒夫編. (2004). 教養としてのスポーツ人類学. 千代田区: 大修館書店.
- 「地球の歩き方」編集委員会. (2009). 地球の歩き方 インドネシア 09~10. 港区亥: ダイヤモンド・ビッグ社.
- 21世紀研究会. (2000). 民族の世界地図. 千代田区: 文藝春秋.
- 野村雅一. (1996). 身ぶりとしぐさの人類学. 中央区: 中公公論社」.
- 野村雅一他編. (1999). 技術としての身体. 千代田区: 大修館書店.
- 橋本和也. (1999). 観光人類学の戦略. 京都市左京区: 世界思想社.
- 福島真人. (1995). 身体の構築学. 千代田区: ひつじ書房.
- Floyd 中村千秋他訳 Thompson. (2010). 身体運動の機能解剖. 横須賀市: 医道の日本社.
- ベネディクト・アンダーソン 白石隆・白石さや. (2007). 想像の共同体. 千代田区: 書籍工房早山.
- M・モース. (1976). 社会学と人類学Ⅱ. 千代田区: 弘文堂.
- 水本達也. (2006). インドネシア 多民族国家という宿命. 中央区: 中公公論新社.
- 間苧谷榮. (2000). 現代インドネシアの開発と政治・社会変動. 文京区: 勁草書房.
- 宮崎恒二他編. (1993). アジア読本インドネシア. 東京都: 河出書房新社.
- 宮本謙介. (2003). インドネシア経済史. 千代田区: 有斐閣.
- 村井吉敬. (2004). インドネシアを知るための50章. 千代田区: 明石書店.
- 山下晋司. (1988). 儀礼の政治学. 千代田区: 弘文堂.
- 山下晋司. (2009). 観光人類学の挑戦. 文京区: 講談社.

外国語

- Kaudern, W. (1929). 『*GAMES AND DANCES IN CELEBES*』.
- KebudayaanPendidikan danDepartemen. (1984). 『PERMAINAN RAKYAT SUKU BUGIS MAKASSAR DI SULAWESI SELATAN』
- Millar, S. B. (1989). *BUGIS WEDDING*.
- Negara Makassar. (2001). 『Permainan Rakyat Sulawesi Selatan』.
- Wood, E. b. (1997). *Tourism, Ethnicity, and the State in asian and Pacific Societies*.

URL

外務省ホームページ <http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/indonesia/data.html>

sport snavi.com <http://sportsnavi.yahoo.co.jp/soccer/jtoto/2005/data/acl/index.html>

写真リスト

写真 1	親指にラガをのせる	18
写真 2	パサプー	21
写真 3	カレボシ広場のパラガ像とラマン	25
写真 4	小さな港のパラガ象	26
写真 5	退場のシーン。これは結婚式の時のみ行われる。ススン・サトゥの①である	29
写真 6	フォルマシ・デュアの②	32
写真 7	ススン・ティガ・デュア・サトゥ	33
写真 8	パラガのヒットポイント	35
写真 9	パラガの蹴り方でラガを蹴る（ススン・デュア）。	38
写真 10	3重構造のラガ	39